Sunrise Ministry
アンカー

Anchor

創造主の一大傑作―人間
世界総会におけるピアソン総理の最後の辞
ゴスペルという名の策略
イエズス会の日本戦略
エディ婦人とジャックじいさん

43号
2009年 6月

研　究

創造主の一大傑作人間

金城　重博

人間の性質について正しく理解しないと：

①救いと教育についても誤ってしまう。

②健康改革の使命の重要性を見失ってしまう。

③また、霊魂不滅と日曜礼拝に導かれる。

人間の性質を正しく理解することが**救済、教育**の内容を把握するのにどんなに重要かということについてE. G. ホワイトはなんと言っているだろうか:

「教育という働きに包括されている内容を理解するには、**人の性質**と、人を創造された神の御目的とを考えてみなければならない。同時にまた悪の知識がはいってきたために生じた人間の状態の変化と、人類の教育についての大いなる御目的を今もなお成就されている神のご計画を考えてみる必要がある」(教育4)。

「人類を創造された神の御目的が実現されるように、人の中に創造主のみかたちを回復し、人を創造当初の完全な姿にもどし、知、徳、体の発達を促すこと、これが**救済の働き**となるべきであった。これが**教育の目的**であり、**人生の大目的**である」(教育5)。

1　人間の創造

アダムは、土のちりによって神の形に作られた。神が命の息を吹きいれると、生きた者(魂-欽定訳)となった(創世記2:7)。他のすべてのものは、神のみ言葉によってつくられた(詩篇33:6)。しかし人間の創造となると、イエスは、直接自らの手をもって作業なさった。人間の創造は特異な業であった。生命の息=エネルギーが吹き込まれると、「生きた者(魂〈欽定訳、弥永訳〉)」となって**肉体、知性、霊性**の**能力**が**機能**し始めた。

体、知、霊の**能力(機械装置)**

生命の息
(電流)

体、知、霊の**能力(機械装置)**
それが機能　すると

品性が
形作ら
れる

●人間の創造の目的

神が肉、知、霊を備えた人間をつくられたのは、ご自分の栄光のためであった。イザヤは言った:

「すべてわが名をもってとなえられる者をこさせよ。わたしは彼らを**わが栄光**のために創造し、これを造り、これを仕立てた」(イザヤ43:7)。

神の栄光は神のご品性である(患難下280、キ実390)。

「アダムが創造主のみ手によってつくられたとき、彼の**肉体**と**知能**と**霊性**は、神のみかたちをそなえていた。『神は自分のかたちに人を創造された』(創世記1:27)としるされている。神の御目的は、人が長く生きれば生きるほど、ますます、はっきりと神のみかたちをあらわすこと、すなわちなおいっそう明らかに**創造主の栄光**を反映することであった」(教育4)。

「人間は神の**創造の最高傑作**であり、**神のみかたちに似せて造られ**、**神の写し**となるように計画された。しかしサタンは、人間のうちにある神のみかたちを消し去って、自分自身のかたちを人間に刻み込むために力を注いできた」(RH 1895/6/18)。

「わたしはあなたをほめたたえます。わたしは非常に不思議に造られたからです、あなたのみ業は驚くべきものです」(詩篇139:14　欽定訳、弥永訳)。

人間の創造を考えるとき、キリストとサタンの大争闘という観点から見ていくとさらに意味深い。天で開始された熾烈な戦いは、地上に戦場が移された。そしてサタンの主張を打ち破り、神を擁護するために人間は造られたのである。

「神は、真理と公平にかなった方法しかお用いにならなかった。サタンは、神がお用いになれないもの、すなわち、へつらいと欺瞞を用いることができた。彼は、神の言葉を偽りであると言い、神の統治計画を曲解して示した。そして、神が天使たちに律法を課するのは正しくないと言った。また、被造物に従順と服従を求めて、神はただ自己を高めようとしておられるのだと言った。したがって、**天の住民と、すべての世界の前に、神の統治は正しく、神の律法は完全であることを示す必要があった**」(人あ上14)。

創造主の最高傑作は人間であったとするなら、宇宙、地上のどんな神秘的なものより、人間そのものが神の存在とその偉大さを明らかに証するはずである。「最も創造主の栄光を反映する」ものである。

人間はなんという壮厳な起源を持つ存在だろうか！そんなことを考え、瞑想すると「神の理想に到達したいというのぞみ」が湧いてくる(教育9)。人は眺める(考えめぐらす)ことによって変えられるというのが精神の法則(人あ上89)であるから、NHKのテレビ番組で下等生物から人間が進化したなどという、たとえ美しい幻想的な物語であったとしても、宇宙のブラックホールに投げ込みたいものである。

●人間の可能性

不思議ではないか！

人間の造られた**材料**は「土のちり」であった。それに肉体的**能力**、知的**能力**、霊的**能力**(道徳的能力)という**機械装置**を組み込み、「**命の息**を吹きいれた」ら**生きた者(魂)**となった。最初は、「**天使よりも少し低く**」造られた(ヘブル2:7、詩篇8:5の「神よりも低く」は欽定訳では「天使よりも少し低く」弥永訳「み使いよりも少し低く造られ」となっている)。

1. 人間は、天使よりも少し低く造られたが(下等な動物から進化したのではなく)、
2. 天使たちと同等になり、
3. ついには、天使たちよりも高められる。

「人間は、神の感化力と人間の努力を結合して、天使の地位にまで自分を高めるほどの進歩する**能力**が授けられた」(4T 340)。

「神は、み子と相談して、ご自分らのみかたちに人間を創造する計画をお立てになった。人間は恩恵期間(試験期間)の下に置かれた。人間はテストされ、試されることになっていた。もし彼が神のテストに耐えて、最初の試験の後でも忠実そして誠実であり続けるならば、彼は、絶え間ない誘惑で攻撃されずに、**天使たちと同等なものに高められて**、その後は永遠に死なないはずであった」(RH 1874/2/24)。

「神のみかたちに一致しようと努力する人類には、豊かな天の宝とすぐれた力が与えられて、堕落したことのない**天使たちよりもさらに高い地位におかれることになる**のである」(キ実143,144)。

何という運命であろう！　M. L. アンデレアセンは次のようにコメントしている:

「『**しばらくの間**、彼を御使たちよりも低い者となし…』（ヘブル2:7）。多くの点で人間が天使たちよりも今は低い者であるということは、明らかである。しかし、**人間が高い者になるという可能性を秘めている**ことも、同様に明白である。

天使たちは力に卓越している。光の速さよりも速く移動する。人間には与えられていない力をもっている（詩編103:20、ダニエル9:21、イザヤ37:36、列王記下19:35）。天使たちは、地上の偉大な者たちにさばきを宣告し、執行する。神の聖徒たちを守り、彼らのまわりに陣を敷く。サタンをつなぎおく力をもっている（ダニエル4:13,17、詩編34:7、黙示録20:2）。

「しばらくの間」天使より低く造られて生きる恩恵期間、テストの期間が与えられたが、神は人間の想像もし得ない高い理想を持っておられたのである。

●人間に与えられた能力

それは下の図のようにたとえることが出来よう。各々の器具に電源から電気が送られると、それぞれの異なった機能を果たす。そのように、人間は特異な能力が与えられて、神の息が吹き込まれるとき、人間としての機能をする。電灯は電灯として、洗濯機は洗濯機として、オーブンはオーブンとして機能する。人間は動物界に属するから、他の動物と似ている機能もあるが、人間にしかできない働きをするのである。「神のみかたちにかたどってつくられた人間のひとりびとりに、創造主の**能力**に近い**能力**—個性、すなわち、思考し行動する**能力**がさずけられている」（教育6）。人間は創造主の一大傑作である。猿は猿として、キリンはキリンとして、イルカはイルカとして機能する。はじめからそのように、それぞれに機械装置が設置されたのである。猿から人間に進化するというのはサタンが作り出した最大欺瞞の一つである。

2　人間を構成するもの

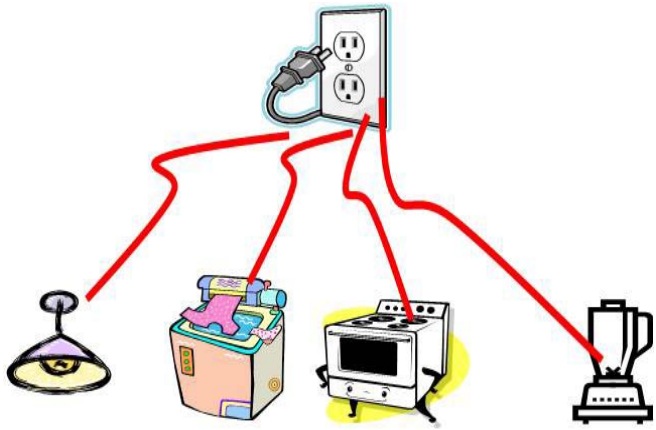
1．三つに分ける場合：
- からだと心と霊（三つの能力）—1テサロニケ5:23

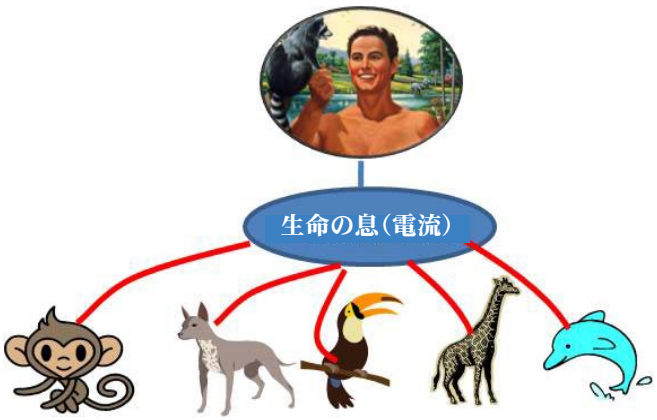
2．二つに分ける場合:
- 肉と霊—2コリント7:1
- からだと魂—マタイ10:28、1コリント7:34、ヤコブ1:13,14
- 幕屋とわたし—2ペテロ1:13,14、2コリント5:1,4

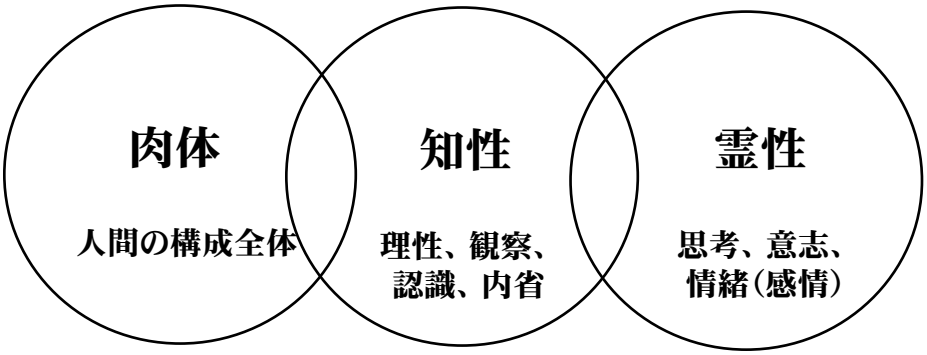
3．**外なる人**と**内なる人**とを分ける場合：
- 外なる人と内なる人—2コリント4:6

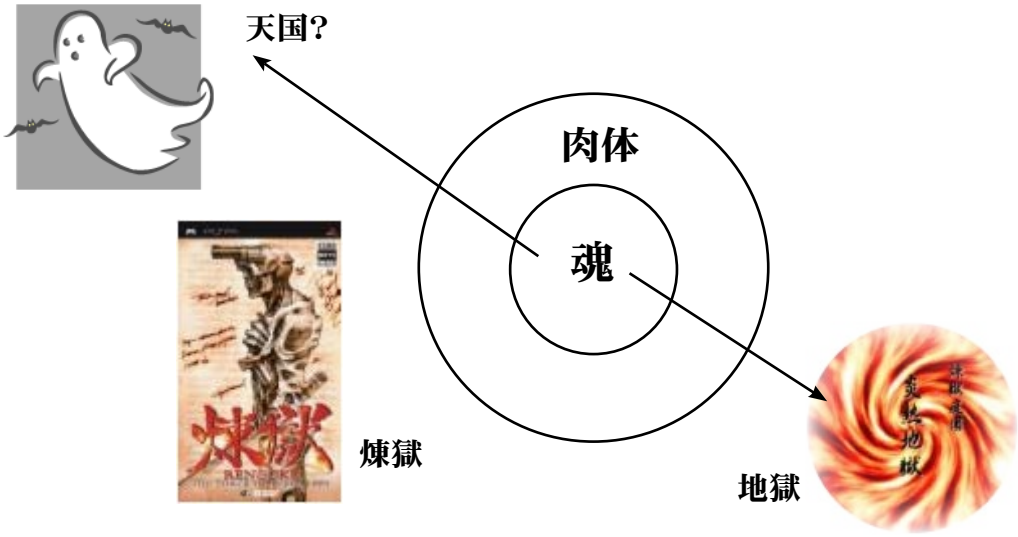
外なる人には、人間の肉体、組織、器官、神経、脳、それに肉体的、知的、道徳的**能力**が含まれている。**能力**は品性を構成しないことを覚えていなければならない。

「神が我々に与えられた**知的、道徳的能力は品性を構成しない。それはタラント**であって、我々はそれを改善し、そして正しく改善されるなら、**正しい品性**を形作るのである。人は手に尊い種を持っているかもしれない。しかし、その種は果樹園にはない。種が木になるためには植えられなければならない。心は畑である。**品性は実**である。神は我々に啓発し発達させるために**能力**を与えられた。我々の歩みが我々の品性を決定するのである。調和のとれた尊い品性となるためにこれらの**能力**を訓練するのである。我々自身しかできない働きを持っているのである」（4T606）。









内なる人とは、品性、魂、精神、霊のことである。

品性は思考（考え方）と感情でもって作られている(5T310)。

「考え方がまちがっていると、感じ方もまちがいます。考え方と感じ方は共に一つになって道徳的品性を作りあげているのです。もしクリスチャンとして、ものの考え方や感じ方を抑制する必要がないと心にきめると、悪天使たちの影響をうけ、彼らの存在と支配を招きます。自分の印象に屈服し、自分の思いが疑いや迷いやぐちにとらわれるとき、私たちは最も不幸な人間となり、一生は失敗に終ります」（青年83）。

●肉体的、知的、霊的能力の密接な関係

我々が肉体、知能、道徳の力の結びつきを理解することは非常に重要である。それを理解しなければ、三天使のメッセージの多くの重要な側面を理解することはまったく不可能になる。

●バビロンの人間性に関する考え方

多くの人は、人間の三つの分野を上の図のように考えている。肉体、知性、霊性（道徳性）は、少しは関係しているが、不可分の密接な関係があるとは考えていない。

黙示録にカトリックとプロテスタントのことをバビロンと表現している。混乱という意味である。バビロンは人間の性質についてこうした混乱した考えを持っている。バビロン諸教会の大きな誤りは、こうした人間の性質に関する誤った考えから来ているのである。

①　何を飲もうが食べようが肉体の健康は、知性、霊性にはそう影響を及ぼすものではない。心、魂の救いとは関係がない。従って黙示録14章の第一天使の使命の重要な部分、健康改革の使命を持っていないのである。肉体の健康が知的、霊的発達と品性形成にどれほど影響を及ぼすかということについて我々はもっともっと留意するように神は求めておられる。「あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝える」べき「永遠の福音」の一部である。神は言っておられる:「だから、飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである」と(1コリント10:31)。

② 彼らは霊魂は肉体から離れて存在し、機能するものとして捉えている。肉体が死んでも、知性と霊性、すなわち、霊魂は不滅であるというのである。従って、死者との交通は可能であるというのである。肉体が壊れて死ぬと、良い霊魂は天国へ行き、悪い霊魂は地獄へ行くという。愛する者たちが天国から見守っているということに慰めを見出そうとするのである。または、地獄へ行った霊魂の呪い、災いを恐れてなだめの業をするのである。心霊現象にだまされた人間は、どんなことでもする。

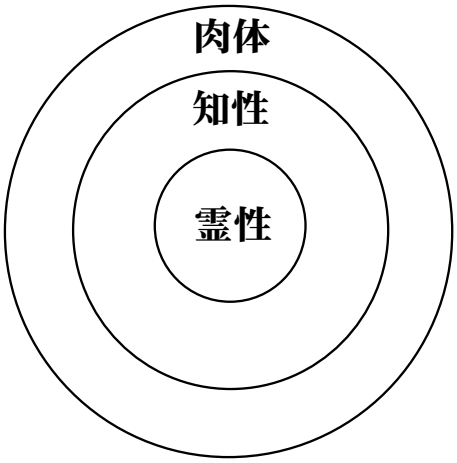
「生きている者は死ぬべき事を知っている。しかし死者は何事をも知らない、また、もはや報いを受けることもない。その記憶に残る事がらさえも、ついに忘れられる。その愛も、憎しみも、ねたみも、すでに消えうせて、彼らはもはや日の下に行われるすべての事に、永久にかかわることがない（キリスト再臨の時の復活まで）」（伝道9:5,6）。

肉体が壊れると、魂＝知性、霊性は肉体を離れて機能するという。

こうして霊魂不滅説が異教、カトリック教会、プロテスタント諸教会の重要教理となっているのである。

●聖書が教える人間性

しかし、黙示録14章の三重の使命は、人間の性質に関してまったく違った考え方を提供している。人間は基本的に肉体という組織体で、**すべての機能は肉体を通してなされる**のである。「**肉体は知脳や精神が品性向上へと発達するための唯一の媒体である**」（ミニ100）。「精神と肉体の間には非常に密接な関係がある」（ミニストリー218）。



●人間の性質について学ぶときに次のような真理を知る

1．健康改革の重要性

人間の能力を弱めるものは何であっても、知的、道徳的な能力をも弱めるのである。その点について預言の霊は明快に教えている:

「心と魂は、肉体を通して表現されるのであるから、知的また霊的な力は肉体の力と活動によって大いに左右される。肉体の健康を増進するものはすべて強い精神と均斉のとれた品性の発達を助長する。人は健康でなければ、自分自身に対する義務を、また人類同胞に対する義務と創造主に対する義務を、はっきり理解することも完全に果たすこともできない。したがって健康は品性と同様に忠実に保護されなければならない。生理衛生の知識はすべての教育の働きの根本でなければならない」（教育232）。

「健全な知性のためには、健全な身体が要求される」（5T152）。

「肉体をおろそかにすることは精神をおろそかにすることである」（3T486）。

「不適切な肉体の習慣は・・・知的な良い訓練・・・に影響を及ぼす」（CT299）。「肉体の健康を増進するものはすべて強い精神と均斉のとれた品性の発達を助長する」（教育232）。

「肉体と道徳的な性質の間には密接な関係が存在する」（食勧151,254番）。

「体力を減退させるものは、何であっても、精神を弱め」る（食勧44,62番）。

「健康を害することは、何であっても、身体の活力を減退させるばかりでなく、知脳の力や道徳の力をも弱める傾向がある」（ミニ99〈一部改訳〉）。

運動不足、空気不足、水不足、日光不足、寝不足、不節制、不信頼、不信仰、栄養不足、そしてこれらの過多….取りすぎ、やりすぎは良いもの、良いことであっても体に悪い。肉体に影響を及ぼすことはすべて、知性、霊性にも影響を及ぼす。

2．霊魂不滅説の非合理性

肉体を離れて知性、霊性は機能しないので、霊

魂不滅はあり得ない。聖書は、人が死ぬとキリストの再臨の復活の時まで無意識のうちに眠り続けると教えている。

「死んだ者はまた生きない。亡霊は生き返らない。それで、あなたは彼らを罰して滅ぼし、彼らの思い出をことごとく消し去られた」（イザヤ26:14）。

「ここで、あなたがたに奥義を告げよう。わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは変えられるのである」（1コリント15:5,6）。

我々は死後の状態について無知であってはならないと警告されている。聖書は現実的な次のような慰めを与えている:

「兄弟たちよ。**眠っている人々**については、**無知でいてもらいたくない**。望みを持たない外の人々のように、あなたがたが悲しむことのないためである。わたしたちが信じているように、イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さるであろう。わたしたちは主の言葉によって言うが、生きながらえて主の来臨の時まで残るわたしたちが、眠った人々より先になることは、決してないであろう。すなわち、**主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり**、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう」（1テサロニケ4:13-17）。

人は死んですぐに天国行ったり、地獄へ行ったりして報いを受けるのではない。キリストの再臨の時に報いを受けるのである。

「見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう」（黙示録22:12）。

3　肉体的、知的、霊的能力は品性を作る道具であり、タラントである。

「神が我々に与えられた**知的、道徳的能力は品性を構成しない**。それはタラントであって、我々はそれを改善し、そして正しく改善されるなら、正しい品性を形作るのである。人は手に尊い種を持っているかもしれない。しかし、その種は果樹園にはない。種が木になるためには植えられなければならない。心は畑である。**品性は実**である。神は我々に啓発し発達させるために**能力**を与えられた。我々の歩みが我々の品性を決定するのである。調和のとれた尊い品性となるためにこれらの能力を訓練するのである。我々自身しかできない働きを持っているのである」（4T606）。

従って、我々は肉体、知性、霊性のあらゆる能力を発達させる努力をするように勧められている。これはクリスチャンの義務である。

「心のすべてをもって、あなたの魂のすべてをもって、あなたの知力のすべてをもって、あなたの力のすべてをもって、主なるあなたの神を愛せよ…」（欽定訳:マルコ12:30）。

この命令はこの地上において**出来るだけ最高の点**にむかって我々の全ての能力が均整のとれた発達を遂げるよう呼び掛けている。我々にはこの地上において新しい能力が与えられることは決してないが（キ実98～99参照）、またこの地上において聖なる肉を持つことは決してないが（2SM32）、神の恵みを通して、肉体的知的道徳的能力を大いに改善することができる。ひとつ確かなことは、彼らの能力をできる限り最善の状態に保つことを怠る者は主の大いなる日の戦いに立ち得ないであろう。

①　肉体の発達

「健全な精神は健全な肉体を必要とする」（3T 152）。

「間違った肉体的習慣は頭脳に影響し、学生が望んでいる最良な知的訓練の達成を妨害する」（CT 299）。

「心と魂は、肉体を通して表現されるのであるから、知的また霊的な力は肉体の力と活動によって

大いに左右される。肉体の健康を増進するものはすべて強い精神と均斉のとれた品性の発達を助長する」（教育232）。

「精神と肉体の間には非常に密接な関係があり、一つが侵されると他もそれに伴う」（ミニ218）。

「身体の組織全体を連結している脳神経を仲介として天と人との交際が行なわれ、魂の感動が与えられるのである。神経組織の感応電流の循環が妨げられて、活力が弱くなり、知的感受性がにぶくなるときに、霊性の目ざめはいっそう困難になる」（教育248）。

②　知性の発達

「もしイスラエル人が教えられた教訓を守り、その特権によって益を得ていたなら、健康と繁栄の世界的実物教訓となったはずである。もし一国民として神の計画に従って生きたならば他の国民がかかった病気から守られていたのである。彼らは他のいかなる民族よりもすぐれた体力、知力を持ち、地上における最も強い国民となっていたのである」（ミニ259）。

「神のみが人間の知性の力を測ることができる。人が無知という低地に留まることで満足するようには神は計画されなかった。かえって**知性の発達**に努めるようあらゆる立場を利用すべきである。すべての男女は非常な**知的偉大さに到達する義務**があると感じなければならない」（4T413）。

「すべての青年たちは、タラントを最大限に用いるために現在の機会に全力を尽くすべきである。そうする者は、**どんな高い道徳的、知的教養にまでも到達することができる**。しかしそのためには勇敢な断固とした精神を持たなければならない。彼は快楽の声には耳を閉ざす必要がある。しばしば仲間の勧誘を拒否しなければならない。自分の目的からそれないように常に警戒しなければならない」（SD 333）。

「彼らは**知的偉大さの最高峰に達することができます**。もし信仰の原則によって調和がとれているなら、彼らはキリストが成就するために天からおいでになったその働きを前進させることができ、そうすることによって主と共に働く者となることができます」（青年166）。

「**知性を啓発し、記憶力を駆使**すべきである。すべての**知的怠慢は罪**である…..」（4T399）。

「神は、わたしたちが**知能を啓発**することを求めておられる。神は、神のしもべたちが、世の人びとよりすぐれた知性と識別力とを持つことを望んでおられる。また、彼らが、不注意と怠惰のために有能で機敏な働き人になろうとしないことを悲しまれる。主は、心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主を愛するようにお命じになる。これは、わたしたちの全能力をあげて、創造主を知って愛するようになるために、知能を力の限り発達させる責任がわたしたちに負わされたことを言っている。

知能は、聖霊の支配下におかれて、**啓発されれば啓発されるほど**、それは神のために力ある働きをすることができる。たとえ教育はなくても、神に献身して、他を祝福したいと望んでいる人は、神のご用のために主に用いられることができるもので、現にそのような人もある。しかし、十分な教育を受けた人が、同じ献身的精神をもったとすれば、キリストのために更に広範囲の働きをすることができる。彼らは、有利な地位に立っているからである。修得した知識を他に分け与えるために、できる限りの教育を受けるように、神はわたしたちに望んでおられる。

人がどこでどのような働きに召され、神に代わって語るようになるかは、だれにもわからないのである。人が将来どのようになるかを知っているのは、ただ、わたしたちの天の父だけである。わたしたちの弱い信仰では認めることのできない可能性が、わたしたちの前途にはある。そこで、わたしたちは、知性をみがいて、必要ならば、この地上の最高の権威者の前に立って、みことばの真理を明らかにし、神のみ名の栄光を輝かすようにしなければならない。神のために働くために、知的な準備をする機会は、一つでも見のがしてはならない。…

わたしたちに与えられた機会と特権にめざめさえすれば、**自学自習**によって、はるかに大きな成果を見ることであろう。真の教育ということは、大学の教育以上のものを意味している。科学の研究も無視してはならないものではあるが、神と生きた交わりを保つことによって、はるかに**高等の教育**を受けることができる。学生は、聖書を手にして、大教師イエスとの交わりにはいらなければならない。そして、みことばの探究中に出てくる困難な問題を解決することができる知能を訓練し養成しておかなければならない」（キ実307－309）。

「わたしたちは、神を信じ、神が人の心に働く力を信じているから、知力と理解力、技術と知識にすぐれていることを示さなければならない」（キ実334）。

「青年が、もしダニエルのように、天来の教師について学ぶならば、エホバを恐れることが知識のはじめであることを自ら知るようになります。このように堅い基礎を置くことによって、彼らはダニエルのように、あらゆる特権と機会を最善に利用し、どんなに**高い知的教養**にも到達することができます。神に献身し、神の恩恵の保護と聖霊の生かす力のうちにあるとき、彼らは単なる世俗の人々よりも深い知的な能力をあらわします」（青年186）。

「これは、わたしたちの全能力をあげて、創造主を知って愛するようになるために、知能を力の限り発達させる責任がわたしたちに負わされたことを言っている」（キ実308）。

「クリスチャンは、世の人よりももっとすぐれた**知性とするどい識別力**を持つべきである」（4T545）。

「日常の平凡事にばかり心を奪われていると、心はいじけ、衰弱する。崇高かつ遠大な真理を理解するために心を働かせなければ、それはついには発達の能力を失ってしまうであろう。心の退化を防ぎ、その発達を促すには、神のみ言葉の研究にまさるものはない。知的な訓練の方法として、聖書は他のどんな本よりも、また他のすべての本を合わせたよりも効果がある」（教育133）。

「いろいろな部分をさがし出してその関係を研究するときに、人の頭脳の最高の能力は盛んに活動する。このような研究に従事するときに**知力は必ず発達する**のである」（同）

「**聖書の研究ほど知力を強めるに適切なものはありません**。どんな書籍でも、聖書の広範、高尚な真理ほど、人の思想を高め才能を強めるものはありません。**もし、神のみ言葉を正しく研究するならば**、人は広い知力と、高尚な品性、確固たる目的をもつことができますが、今日そうした人は非常にまれであります」（キ道123）。

③　道徳性の発達

自ら考える訓練

「神のみかたちにかたどってつくられた人間のひとりびとりに、**創造主の能力に近い能力―個性**、すなわち、**思考し行動する能力**がさずけられている。この能力が発達してはじめて、人は、責任を負う者となり、事業の指導者となり、他人に感化を及ぼす者となる。この能力を発達させること、すなわち青年たちが、ただ単に他人の思想を反映する者とならないで、**自ら思考する者となるように、彼らを訓練することが真の教育の働き**である。人が書いたり、言ったりしたことばかりに、生徒の研究を閉じこめないで、彼らを真理の泉、すなわち自然と聖書の中に開かれている広い研究の分野に導かなければならない。人間の本分と運命について、重大な事実を熟考するときに、彼らの心は強くそして大きくなる」（教育6,7）。

意志の力

「ただ必要なのはほんとうの意志の力とはなんであるかを知る事であります。意志とは人の性質を支配している力、決断力、選択の力であります。すべてはただ意志の正しい行動にかかっているのであります。神は人間に選択の力をお与えになりました。つまり人がそれを用いるようにお与えになったのであります」（キ道60）。

情緒、感情

感情は洗練される必要がある。「これら（感情）は和らげられ、洗練され、高められる必要がある」（4T365）。

発達させる必要がある。「あなたは日常生活において、優しさや親しみやすさといった情感を発達させる必要がある」（3T466）。

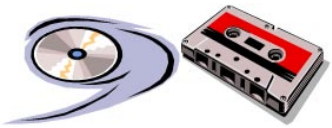
4　品性だけが永遠に残る宝である

「神のかたちにかたどって形成された品性は、この世から来るべき世界に持って行ける唯一の宝である」（実物307）。

次ページのように例えることができよう。プレーヤーは人間の肉体、知的、霊的能力が組み込まれた人間全体である。電気が来ると録音したり再生したりという機能が働く。それはテープやCDに録音する。プレーヤーが壊れてもそれは残る。しかし、それはプレーヤーを離れては機能しない。

ＳＤＡで教えられてきた死後観にあいまいな点

ソフト＝霊＝品性



ハード＝肉体、組織、器官

があったのではないかと気がついた。人は死んだら、知識も愛も憎しみも何もない。確かに知性も霊性も機能しないが、すべて消えて無になってしまうのではない。その人の霊＝品性は神のもとに保存されるというのである。肉体を離れては決して機能しないその人のソフト=霊＝品性は残るのである。従って心霊現象はあり得ない。それは悪天使たちの仕業である。

「我々の**個性**は、墓に入った時と同じ物質の分子あるいは素材ではないが、**復活のために保存される**。神の驚くべきみ業は人間にとっては神秘である。**霊**、すなわち人間の**品性**は、神に帰り保存される。復活においてすべての人間は自分自身の品性を持つのである。神はご自分が定められた時に、人を死から呼び出され、再び命の息を与え、乾いた骨に生き返るように命じられる。同じ形で出てくるが、病気やあらゆる欠陥は一切なくなっている。容貌は同じ個性を持っているので、友人は友人を認識する」（スタディーバイブル新377、MS76,1900）。

この理解は、人間のどんな能力も、品性が正しく機能するときにのみ安全であることを教えている。

どんなにすばらしい肉体の能力があっても、品性（思考と感情）が正しく機能していないと誤って、罪を犯し、滅びることがある。

イスラエルの最初の王サウルは、「イスラエルの人々のうちに彼よりも麗しい人はな」かった。背が高く、立派で気高い威厳を備えた人であった。しかし、彼は悪霊の奴隷となるくらい、悪い思い、感情に振り回された。サウルの品性について次のように書かれている:

「サウルは、イスラエル王国を統治したが、自分の心を治めるべきことを学んでいなかった。彼は、衝動のままに物事を判断し、烈火のように怒り狂った。彼は、感情を爆発させて、彼の意志に逆らう者を殺そうとするのであった。彼は、こうした狂乱状態のあとで、意気消沈と自己嫌悪と後悔の念に襲われるのであった」（人あ上326）。

神から見捨てられたサウルはエンドルの「口寄せ」巫女に助けを求めた。そしてついに自害するにいたった。

十二弟子の一人、ユダも知的に優れた人であった。わたしは道であり、真理であると言われた御方を裏切って、自害するにいたった。

サムソンは素晴らしい力の持ち主であった。しかし、悪しき思想と感情の奴隷となり、惨めな死に方をしたことが記録されている。

世界的に有名になったプロレスラー、力道山は喫茶店でチンピラたちに誤って足を踏まれて、謝っているのにゆるせないで、とうとうチンピラにさされて病院に担ぎ込まれてそのまま息を引き取ったと聞いたことがある。

どんなに、すばらしい芸術、技術でもって世に名を売っても、品性（考え方と感情）が神の恵みによって支配されていないとみじめなものである。人をほんとに美しくするのは、内なる人―品性である。

「天の神の評価で、大いなるものとは何だろうか。世の人々が大いなるものとみなしているもの、すなわち富や階級や名門や知的な才能自体ではない。もし神を考慮に入れない知的な偉大さに尊敬の価値があるとしたら、われわれの尊敬は、どんな人間もくらべることのできない知力をもっているサタンに当然ささげられる。だが自我に奉仕するために悪用されるとき、知力は、その才能が大きければ大きいほど、一層大きなわざわいとなる」（希上273）。

花婿イエスを迎える最後の世代の品性は、美しく調和のとれた品性である。

「また、**しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会**を、ご自分に迎えるためである」（エペソ5:27）。

「その日、彼らの神、主は、彼らを救い、その民を羊のように養われる。彼らは冠の玉のように、その地に輝く。そのさいわい、**その麗しさは、いかばかりであろう**…」（ゼカリヤ9:15,16）。

なんというチャレンジであろう！。神のみ言葉の約束を信じ待とう！

次回は、「人間の堕落とキリストの性質」

教　会

世界総会における ピアソン総理 最後の辞

ロバート・ピアソン元総理　　砂川満　訳

1978年10月15日、セブンスデー・アドベンチスト世界総会の総理であったロバート・ピアソン長老が、年に一度の総会において最後の辞を述べた。年会には、世界各地のセブンスデー・アドベンチスト教会の代表者が一堂に会し、教会運営について話し合う。1978年の総会において、ピアソン総理は熱烈に語り、当時セブンスデー・アドベンチスト教会内で見られたある気がかりな風潮について警告した。これらの風潮は、1950年代後半に、世界総会牧師会の指導者らが福音派の代表的人物であったウォルター・マーティン氏と会見し、彼がセブンスデー・アドベンチストを調査するにあたっての助けとなる文献を提供したことに端を発していた。**1950年代にまかれた種**がピアソン氏の在任中に芽を出し、我々の時代に実を結ぶこととなった（※このメッセージの終わりの付記を参照）。

ピアソン長老の辞を読むと、当時セブンスデー・アドベンチスト教会が当面していた危機を彼が深く認知していたことに驚かざるを得ない。また彼は、近い将来さらに大きな危険が教会に臨むことを予見していた。そして、彼の言葉の通りになったことは言うまでもない（セブンスデー・アドベンチスト教会の中で何が起こっているかを知りたければ、アドベンチストブックセンターで手に入る「我らここに立つ」という本をお勧めしたい）。

ピアソン総理の最後の辞を読むにあたり、愛するセブンスデー・アドベンチスト諸兄姉が、我が愛する教会の特別な使命と任務、希望と生き方を擁護するようになることを願うものである。

これは私が総理として、世界中から来られた私の教会、あなたの教会、または私たちの教会の指導者の方々に向かって申し上げる最後の機会となることでしょう。

先ごろラルフ・ニール夫妻が執筆された本の中で、概してセクト（分派）がどのように教会へと発展するかについて述べられた箇所に、私は留意しております。セクト（分派）はしばしば、おびただしい意欲と信念を持ったカリスマ的な指導者によって始められ、それは教会内の世俗化と形式主義に対する抗議として起こると、ご夫妻は述べておられます。そして一般的に、貧困層がそれに喜んで応じます。それは不人気でさげすまれ、一般社会において抑圧されているために、富裕層にとっては失うものが多すぎて参加しにくいものになっています。セクト（分派）には明確に打ち出している信条があり、熱心な信者がそれを固く支持します。各信者はそれに参加することを個人的に決断し、その信条を把握しています。組織は確立されておらず、所有する財産も建物もあまりありません。そのグループには厳格な標準があり、それらが信者のふるまいを抑制しています。多くの場合、指導者は学歴がなくとも、内から湧き出る情熱によって立ち上がった人たちです。広報活動にはほとんどこだわりません。

そして、それが**二代目**に引き継がれます。成長するにつれて、組織化と建物が必要になってきます。産業と倹約の結果、信者たちは裕福になっていきます。富が増してくると、迫害は下火になり始めます。運動の只中に生まれた子供たちは、それに加わるための個人的な決断をする必要がなくなります。こういった二世たちは、自分たちの信条の根拠を持っていません（彼らは自分たちが何を信じるかを必ずしも知る必要がありません）。自分自身の立場をわざわざ打ち出す必要がないからです。彼らのためには、すべてお膳立てが整えられているのです。指導者は、その人自身の情熱に

よるよりも、先輩たちへの従順によって選出されることがしばしばです。

三世の代になると、組織は発展し機関は確立されます。父祖たちの信仰を次世代に伝えるための、学校の必要が訴えられます。大学校が設立されます。信者は標準に従って生きるようにと熱心に勧められる一方で、信者たちの標準そのものは低下の一途をたどります。団体は名ばかりの信者の扱いが甘くなります。伝道熱は冷めつつも、広報活動には熱心になります。指導者たちは教会の宣伝方法を勉強し、時には報酬を提供して信者の働きを促します。若者たちは自分たちが他の人たちと違うことについて疑問を抱くようになり、未信者と結婚するようになります。

四世の代になると、かなり機械的になります。管理職の数が増加する一方で、草の根運動を展開する働き人の数は逆に減少します。教理を定義づけるための大々的な教会会議が開かれます。さらに多くの学校、大学や神学校が設立されます。それに携わる人たちは認可を得るために世の中へ出て行き、世俗化してしまいます。教会の立場の再検討がなされ、運営方法が現代化されます。芸術、音楽、建築物、印刷物への新たな関心と共に、同時代の文化に注意が向けられます。受けのいい主義、主張におもねることによって、運動は世俗社会に密着しようと努めます。礼拝は形式化します。団体は、世に諸手を挙げて受け入れられるのを好むようになります。セクト（分派）が教派となったのです！

兄弟姉妹方、このような事態がセブンスデー・アドベンチスト教会に起こるのを断じて許してはなりません！セブンスデー・アドベンチスト教会に起こってはいけない事なのです。これは単なる一教派ではなく、神の教会だからであります。

そして、今朝この教会堂に列席しておられる皆さんは、そうならないことを確かなものとするために、神が期待しておられる男女なのであります。

兄弟姉妹方、すでに教会をかき乱し始めている狡猾な勢力が存在します。残念ながら教会内に、霊感の書としての聖書の価値を下げ（聖書の霊感をけなし）、創世記の最初の十一章を嘲笑し、証の書に載っている簡潔な地球の年代学に疑問を呈し、暗にまたは露骨に証の書を攻撃する者たちがいるのです。宗教改革者や現代の神学者を指して、セブンスデー・アドベンチスト教理のよりどころまた規範とする人たちもいます。アドベンチズムの陳腐な語法に飽き飽きしている人もいるそうです。私たちがこよなく愛する教会の標準を忘れたいと願う人たちもいます。福音派に憧れ、彼らの好意を得ようとする人たち、すなわち**特異な民という外套を脱ぎ捨て、世俗の物質的な世界の手法に倣おうとする人たち**もいるのです。

同胞の指導者諸君、並びに親愛なる兄弟姉妹方、**そのような事態を許してはなりません。**今朝私は、心の底から熱烈に皆さんに訴えたいと思います。そのような事態を許してはなりません！アンドリュース大学とローマリンダ大学、中でも神学部の皆さんに訴えます―そのような事態を許してはなりません！　**私たちはセブンスデー・アングリカン（聖公会）でも、セブンスデー・ルーテル派でもなく、セブンスデー・アドベンチストなのです！**　これこそ、神の最後のメッセージを有する、神の最後の教会なのです。

皆さんは、セブンスデー・アドベンチスト教会を神の残りの教会、すなわち最後に勝利する教会として保持することを神が期待しておられる男女、指導者なのであります。

主の僕は次のように述べています。「主の働きにおいて責任を負っている者たちの前に、恐るべき危険が横たわっている。それらの危険を思うと、私は震えおののいてしまう」(2SM391)。またエゼキエル書22：30にはこう書かれています。「わたしがこの国を滅ぼさないように、わたしは、この国のために、わたしの前で石垣を築き、破れ口を修理する者を彼らの間に捜し求めた」新改訳。

同胞の指導者諸君、この教会が神の下で御国へと達するようになるために、神は勇敢な指導者となる男女を、すなわち神の教会とその真理を自分自身の生命以上に愛する男女を探しておられると私は信じています。私たちの前途にある働きは、容易なものではありません。私が聖書と証の書を正しく理解しているとするならば、前途には悩みの時があり、この教会とこの世がかつて経験したことのないほどのチャレンジが横たわっています。

主の僕は次のように述べています：

「魂の敵は、セブンスデー・アドベンチストの間に大改革が起こらねばならないという仮説を持ち込もうとしています。そしてこの改革は、私たちの信仰の柱としての教理を取り除き、再組織することにあるというのです。こんな改革が起きたら、どんな結果になるでしょうか。神がその知恵によって残りの教会に与えられた真理の原則

は、捨てられるでしょう。私たちの信仰も変わるでしょう。過去五十年間働きを支えてきた基礎的原則は誤りであったとされ、新しい組織が作られるでしょう。新しい種類の本が書かれ、知的な哲学の理論が紹介されるでしょう。新しい組織の創設者たちは、都会に行って、すばらしい働きをするでしょう。安息日は重んじられず、それをお造りになった神はあがめられません。この新しい運動の進む道を妨げるものはないでしょう。指導者たちは、悪より美徳がよいと教えますが、神は除外されています。彼らは人間の力に頼りますが、神がなければそれは価値のないものです」（セレクテッド・メッセージ275-276）。

セブンスデー・アドベンチスト教会は、何年も前に**背教のアルファ**を経験しました。皆さんと私は、それと同様の巧妙かつ邪悪な起源を持つであろう、**背教のオメガ**に直面することでしょう。その結果は、アルファよりもさらに破壊的なものとなるでしょう。私は皆さんに嘆願いたします。前途にある事柄について研究し、それを知った上で、神の助けにより民に備えをさせてください。

「神は、緊急事態に直面する用意のできている人たち、危機にあっても誤った側に立つことのない人たちを召しておられる」（RH1903年11月５日）。

「我々は最後の戦いに向かっており、今は妥協すべき時ではない。あなたの特色を隠す時ではない。戦闘が激しくなるときに、誰も裏切り者となることがないように。今は、我々の武器を置いたり隠したりして、闘争においてサタンに有利な立場を与える時ではない」（RH1892年12月６日）。

次に、主の僕が見せられたある幻に注目していただきたいと思います。その中で彼女は、氷山に向かって突進している船を見せられました。彼女は次のように述べています：

「そこには船より高くそびえるように、巨大な氷山が見えました。威厳のある声が叫びました。『そこにぶつかれ！』一瞬の躊躇も許されませんでした。時を移さず、行動すべき時でした。機関士は全速力を出し、操舵手は船を氷山に向けて真正面から進めました。大きな音をたてて船は氷山に衝突しました。ひどいショックがきて、氷山は粉々に壊れ、破片が雷のような音をたててデッキに落ちてきました。乗客は衝突の力で激しくよろけました。しかしだれも命に別状はありませんでした。船は傷みましたが、修復可能でした。船は氷山に衝突してはね返り、生き物のように船首から船尾まで揺れていました。それから航海を続けていったのです。

私にはこの光景の意味がわかりました。私は命令を受けました。私たちの船長である神からの声で、『ぶつかれ』という言葉を聞いたのです。私は自分の義務がわかりました。一刻の猶予もできませんでした。決定的な行動の時がきていました。私は、『ぶつかれ！』という命令に、直ちに従わねばなりませんでした」（セレクテッド・メッセージ276-277）。

同胞の指導者諸君、さほど遠くない将来において、皆さんはそれに直面しなければならないかもしれません。神が皆さんに、恵みと勇気と知恵を与えて下さることを祈ります。

「大争闘が終わりに近づいていると考えるのは、なんとすばらしい事であろう！終わりの働きにおいて、我々は、どう対処すべきか分からないほどの危険に直面するであろう。が、天の三大勢力が働いておられること、神の御手が舵を取っておられること、神がご自分の御目的を成し遂げられるということを忘れないようにしよう。神は世界中から、義をもって主に仕える人々を集められるであろう」（2SM391）。

兄弟姉妹方、私たちにはなんとすばらしい確証が与えられていることでしょう。私たちは神の働きに携わっているのです。この働きは、いかなる人間にも依存していません。それは私たちの神との関係にかかっているのです。私たちにとって未来に直面する方法は一つしかなく、その方法は十字架のもとにあります。カルバリーのお方に目を留めている教会は、決して背教することがありません。

兄弟姉妹方、過去四十五年にわたり皆さんにお仕えできたことを特権に思います。皆さんお一人おひとりに神の祝福がありますように。

付記：

１９５６、７年に神学的、教理的な変化が我が教会に起きた。

キリスト教界で教派の研究、セクト（分派）の研究で有名な、福音主義派のバーンハウス博士とマーチン博士が我が教会の指導者のフルーム、Ｒ．Ａ，アンダーソン、リード、アンルー長老ら

と何百時間もかけて教理の調整をしたのである。セブンスデー・アドベンチストは今まで、非キリスト教的な、珍奇な教えを持つ教派と非難されてきたが、ようやくキリスト教界に仲間入りしたと評された。その結果として「教理に対する質問」が出版された。

アドベンチスト・ライフ1993年6月号の記事を引用しよう:

「１９５７年に牧師会主導で『ＳＤＡ教理への質問』を発行し、聖書とE.G.ホワイトとの関係、キリストの**品位（キリストの性質）**と訳した方がいい）、信仰による義認などの聖書主義を明確にすることで、ようやくＳＤＡも一般キリスト教界から好意を持って受け入れられるようになった」。

マーチン　バーンハウス

アンルー

フルーム

アンダーソン

リード

セブンスデー・アドベンチストの「特別な民」であること、アイデンティティ（独自性）の喪失がここから始まる。

民数記23:9「岩の頂からながめ、丘の上から見たが、これはひとり離れて住む民、もろもろの国民のうちに並ぶものはない」。

雅歌6:8－9「王妃は六十人、そばめは八十人、また数しれぬおとめがいる。わがはと、わが全き者はただひとり、彼女は母のひとり子、彼女を産んだ者の最愛の者だ。おとめたちは彼女を見て、さいわいな者ととなえ、王妃たち、そばめたちもまた、彼女を見て、ほめた」。

5Ｔ78:「我々の唯一の安全は神の**特殊な民**として立つことである」。

国指上30:「彼（ソロモン）はイスラエルを**特選の民**としたところの神へのゆるがぬ服従をしだいに怠り、ますます熱心に周囲の国々の習慣に同調していった。彼は成功と栄誉ある地位に付随した誘惑に負けて、繁栄の源であられる神を忘れた」。

国指上116:「神は各時代を通じて道徳的英雄を持っておられたが、今もなおヨセフ、エリヤ、ダニエルのように、自分たちが神の**特選の民**であることを認めるのを恥としない人々を持っておられる。神の特別の祝福は、行動する人々の働きに伴うのである」。

大争闘上39:「初代のキリスト者たちは、実際、**特殊な民**であった」。

大争闘上247:「サタンは、神の民と世俗とをへだてている壁を取り壊すことによって、神の民に打ち勝とうと絶えず努めている」。

1T525:「神の民はだいぶ**特殊性**を失って、そして次第に世を真似てきた。そして世と混ざることによって、徐々に多くの面において彼らを真似るようになってきた。これは神にとって不愉快なことである」。

NEWS

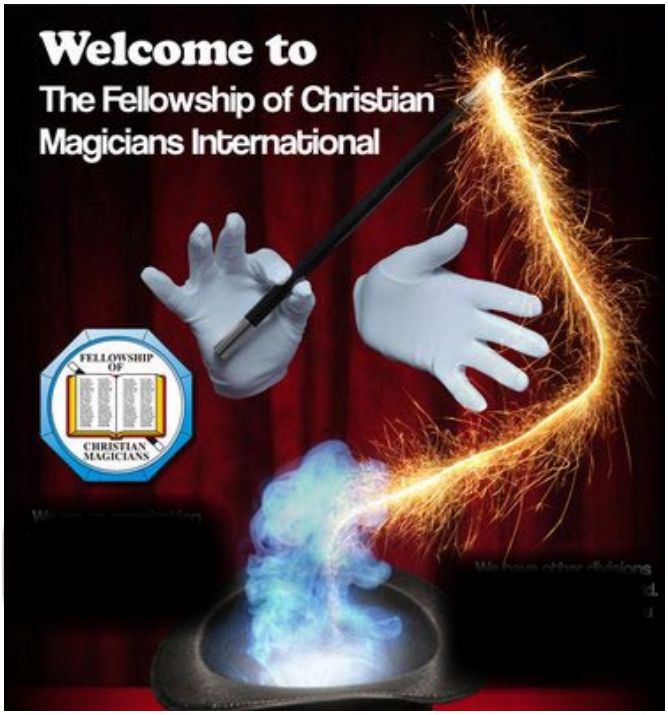
あるテレビキャスターがブッシュ大統領とインタビューした：
「大統領、あなたはプーチン大統領の目に魂を見るとおっしゃいました」　「はい」とブッシュの返答。
「では、ベネディクト16世の目を見るとき、あなたは何をごらんになりますか」「神」と淡々と答えた！

ゴスペルという名の策略

福音宣教の新しい方法

Dr. サムエル・ピピン
ミシガン教区公立大学
キャンパスミニストリー　ディレクター

井上千里　訳



「それは、わたしの民が二つの悪しきことを行ったからである。すなわち生ける水の源であるわたしを捨てて、自分で水ためを掘った。それは、こわれた水ためで、水を入れておくことのできないものだ…。あなたがナイルの水を飲もうとして、エジプトに行くのは何のためか。またユフラテの水を飲もうとして、アッスリヤへ行くのは何のためか」（エレミヤ書２：13，18）。

聖書の各時代を通して、そしてそれ以来、神の言葉を説くことが明瞭で説得力のある、最も効果的な福音宣教の方法でした。使途パウロは宣教の愚かさについて述べています（Ⅰコリント1：21）。

ところが、今日私たちは、聖書を土台とした単純な教えから遠ざかり、その代わりに、この世の滑稽で愚かしい、時には奇妙な伝道方法を用いるようになってきました。私たちはこれらの伝道方法は何も悪くなく、おかしいことではないと自分自身を納得させているかもしれまん。けれども洞察力の鋭い未信者は、教会が世の中のいい加減な物真似をする方法を観察し、それと共に提示される私たちのメッセージも愚かで、意味のない教えに違いない、故に真理のない教会を去るのは当然の事だと考えてしまうのです。なぜでしょうか？これからその理由を説明したいと思います。

ゴスペルマジシャン（福音手品師）？

最近私は、セブンスデー・アドベンチストの大学院生から急な返事を要するＥメールを受け取りました。彼の属する教区内のある教会で起こりつつある問題について、私の意見を乞うものでした。それは、教会の祈祷週のゲストスピーカーとして、ゴスペルマジシャン（福音手品師）を招く計画に関するものでした。学生は彼の憂慮を以下のように書いています。

「私はマジカルトリック（これは世の中一般では普通に行われていることですが）に教会が関係することで、善とそうでないものとの区別を曖昧にしてしまうという不安を抱いています。たとえこれらの手品が、超自然的な力で行われているということを信じる必要がなくても、錯覚（本当でないもの）を真理に混ぜ合わせることによって、真理の重要性を失わせ、ただ教会の子供たちの目の前に誘惑を置くだけのことになってしまうことを恐れています。

教会の兄弟姉妹達は、これは黒か白かということを考えるような重要な問題ではないし、あなたたちは、悪などない所からわざわざ悪を捜し出していると言われてしまいました。そして教会と教会学校に招くことを反対する私たちは　超保守派だとも名づけられています。けれども私はこれは黒だと思います。なぜなら悪の可能性があり、善と悪（教会の人たちは聖書にはマジックを禁ずることなど何も書いていないと言っています）の区別を曖昧にしているからです。教会として、関係するものがもし灰色であったならば、それか

らは離れているべきであり、私たちは悪に対しては、すべての扉を閉ざすべきだと思うのです。

今のところ、教会としてはどのような見解を持っているのかわかりません。私は聖書や証の書から、これらを教会に招き入れることがどのような恐ろしいことであるのかを説明をするための挑戦をさせられてきました。けれども先日は、ゴスペルマジシャン（福音手品師）のセミナーや集会に参加する教会員に対して、この教区はスポンサーになっていることを知らされました。また、アドベンチストのゴスペルマジシャン（福音手品師）のグループが、トロントの世界総会で催しをしたことも再度知らされました。私は教会学校の理事会で同じ説明を試みましたが、集まった委員のほとんどが何も悪いことではないと言うのです。もうすぐ教会の理事会も迫っています。私には聖書からの明瞭な理由が必要です。ご意見をお伺いしたいと思いました。」

セブンスデー・アドベンチスト教会が真理を伝えるための方法として、ゴスペルマジシャン（福音手品師）などと呼ばれているものを教会の集会に招くということを、だれが以前に想像したでしょうか。けれども今日、聖書的に疑問のある礼拝、伝道の方法が教会内に多く取り入れられてきていることが目立っています。驚くことには、これらの現象に対して圧倒的多数の教会員が何が悪いのか全く見えていないのです。

ゴスペルロック、プレイズダンス、セレブレーションスタイル、などと称されるものが礼拝に取り入れられるようになってきました。そして、ゴスペルカフェ、ゴスペル人形劇、演劇、ピエロミニストリー（ピエロの格好をして伝道するアメリカSDA内のグループ）などが、子供や青年、未信者への伝道方法として使われています。そして今、教会はゴスペルマジシャン（福音手品師）が礼拝や祈祷週になくてはならないもののように思われてきました。これらのゴスペルと名のついた伝道の策略を用いることによって、私たちは、愚かな宣教の危険を避けるどころか、愚かな宣教をしているのではないでしょうか。

これからの記事を通して、今日のゴスペルと名づけられた様々な伝道戦略が、新生されていない心に歓迎されるものであること、その結果教会が益々世俗化していき、更には聖書の教えに反した世的な方法を使って伝道することを頼りにしているのなら、私たちは聖書の土台に基づいたセブンスデー・アドベンチストの教えとは、全く逆方向の誤った道へ向かって行ってしまうということを説明したいと思います。

教会内の世俗性

旧ソ連のリーダー、ニキーター・フルシチョフは警戒を要する事態を説明するために下記の話をしています。

当時、ソ連では、盗みが流行のように頻繁に行われていました。そのためソビエト当局は、国の施設に多くの警備員を配置していました。レニングラードという町の材木工場で働くペトロヴィチと、ある一人の警備員は知り合いでした。警備が始まった最初の夜、ペトロヴィチは一輪手押し車に何か怪しげな物を山のように積んで建物から出てきました。

警備員：「ペトロヴィチじゃないか、何をかすめてきたのさ？」

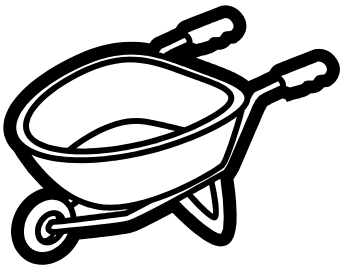
ペトロヴィチ：「おがくずだけだよ」

警備員：「よしてくれよそんなごまかし、見せてもらうよ」

ペトロヴィチは言われるままにすべてを見せましたが、おがくずの他は何も積まれていませんでした。そして警備員はそれを全部一輪車に積み直し家に帰らせました。一週間、同じ出来事が毎夜続きました。そして警備員は非常なフラストレーションに陥り、ついに彼の好奇心が爆発し次のように言いました。

警備員：「ペトロヴィチ、あんたのことは前からよく知ってる、誰にも言わないから教えてくれ、ここから何をこっそり持ち出してるんだ」

ペトロヴィチ：「この手押し一輪車さ」



あなたは、この話を滑稽だと笑うでしょうか。けれども覚えていただきたいことは、現代の革新的と言われている礼拝や伝道の方法は、聖書を信じているというアドベンチストのクリスチャンには、とても滑稽なことなのです。私たちの教会は、世俗的なものが教会に入らないように神学校、教会学校、出版社、ラジオ、テレビ局、その他諸々のものを警備員として配置してきました。けれども敵は、世俗や異教の教えを、私たちの目の前を通過させ教会組織の中に入り込ませています。そしてほとんどの人がそれが見えていないばかりでなく、何が悪いのかもわからないのです。

更には、実際のところとても怪しげな礼拝や伝道の方法を、世と他教会からわれわれの教会の中に取り入れているのです。また、あるアドベンチストの教会員はわざわざアドベンチストでない神学校で学び、ウイロークリーク教会をはじめとする他の宗教、エキュメニカル、カリスマ教会などのトレーニングセミナーや、魂を勝ち取るためのリーダーシップセミナーなどと呼ばれているものに出かけていき学んでいるのです。けれども私たちが認識していない点は、真理の宣教方法の土台を変えてしまう時に、我々のメッセージそのものを変えてしまうことになるのです。そして我々が神のメッセージを変えてしまうとき、メッセージの中心である神を変えてしまうことになるのです。

なぜならこれらの他教会から取り入れる伝道の策略は、私たちのメッセージの信用性、確実性を失わせてしまうのです。アドベンチストは、他教会の方法を真似ることがないようにとの勧告が与えられています。

誘惑

我々の教会の歴史には、いつも他教会を真似る誘惑が教会の指導者にありました。ホワイト夫人は彼女の時代にこれらのことを警告していました。「伝道の働きに新しい働きが入り込んでいます。他教会を真似ようと熱望しています」(ST12/27/1899)。彼女は他教会の影響が私たちの教会に及ぼす影響について強い懸念を示しています。「ある牧師たちは、他教会の方法を取り入れ、彼らのやり方、手法を真似ている」(ST5/25/1882)。他教会から学ぶため彼らの招きに答え、彼らの方法を行う傾向にある我々の教会に危険を警告しています。「彼ら（他教会の人々）は我々と一致し、彼らの計画を受け入れるよう要求し、そして我々の教会の進路に関しても提案をしてくるかもしれません。これは敵に有利な立場を与えてしまうのです」（世界総会掲示板4/13/1891）。

ホワイト夫人の勧告を総合してみると、セブンスデー・アドベンチストだけが真理を持っているのではないことが示唆されています。世のすべての人は、少なからず何かの光を持っていると御言葉も明らかに示しています(ヨハネ1:9、ヤコブ4:17)。そして神様は、自然、歴史、人々の体験、その他様々な方法を通してご自身を現されます(詩篇19、ローマ1&2、ヘブル1:1,2)。それゆえアドベンチストはキリス教をはじめ、カトリック、正教会、ペンテコステ教会などと同じように、一般の世の中（無神論また唯物論であろうと）にもいくらかの神の真理を見出すことができることを認めています。神は真理でありすべての真理の源です。どこであっても真理があるときには、それを受け入れるべきです。

現代の真理

しかしながら、たとえ他教会に光を見出すことができても、アドベンチストは更なる光を持っていると強調されてきました。そして真理を託されている教会として、福音宣教のために神がこの教会を立ち上がらせると信じています。アドベンチストは現代の真理、終末における永遠の福音を持っていると考えています。

問題点は、他教会がいくらかの真理があるかないかということではなく、代わりの質問として、我々の教会の牧師たちが、新しい光をわざわざ他教会から捜し出すべきかどうかということです。我々の教会がこの終末時代に神からの真理を託されている教会ならば、いまだに霊的な暗闇の中にいる教会に、新しい光、新たな真理を得ようと、彼らの教会に出かけて行くべきなのでしょうか。もしそれらの教会がバビロンと象徴されていて、そしてバビロンは倒れているということが真実であるならば、バビロンに逆戻りして、彼らから指導を受けている私たちがどのようにして、バビロンの中にいる兄弟姉妹たちに、「わたしの民よ彼女から離れされ」（黙示録18:4）と警告することができるでしょうか。

こわれた水ため

何世紀も前に、預言者エレミヤは、他信仰の方法を

真似る傾向のある神の民に対して、声高に反対しました。「それは、わたしの民が二つの悪しき事を行ったからである。すなわち生ける水の源であるわたしを捨てて、自分で水ためを掘った。それは、こわれた水ためで、水を入れておくことのできないものだ. . . あなたがナイルの水を飲もうとして、エジプトへ行くのは何のためか、またユフラテの水を飲もうとして、アッスリヤへ行くのは何のためか」（エレミヤ2：13,18）。

ホワイト夫人は、私たちがなぜこわれた水ためから飲むべきでないのかを説明しています。

「私たちは、心に働きかける聖霊が不可欠のものであることを完全に忘れ、伝道の働きに重大な間違いを犯す危険のなかにある。伝道の働きに変化が起こっている。他教派を真似ようと強く望むが、単純さと謙遜さはめったに見られない。若い牧師たちは独創的であることを求め働きに新しいアイデアを持ち込む。しかし興奮が終わると改心者はどこにいるだろうか。罪の告白と悔い改めは見られない。罪人は過去の罪と、違反の生活を考慮することなしに、キリストを信じ受け入れるように訴えられる。心は砕かれない。魂の悔恨はない。いわゆる改心したと言われている者たちは、岩なるキリストに落ちていない」（ST12/27/1889）。

ホワイト夫人は、大失望後の初期のアドベンチストの人々に、たとえ他の教会が再臨運動から生じたグループであっても、現代の真理を受け入れなかったその教会から新しい光を求めないように勧告しています：

「再臨信徒であると公言している種々の団体は、それぞれ真理を少しずつ持っているが、神は、これらの真理をすべて、神の日のために準備をしている神の民にお与えになった。また神は、これらのどの団体も知らず、また理解しない真理をお与えになった。主は、この人々には封じられている事柄を見て理解する用意がある者たちに、開示なさった。もし神が、人々に伝えるべき新しい光をお持ちの場合には、神が選んで愛しておられる人々にそれを理解させてくださる。彼らは、暗黒と誤りの中にある人々のところへ行って、光を受ける必要はない」（初代文集230）。

彼女は続けて言われます：

「わたしは、われわれは最後のあわれみの使命を持っていると信じている人々は、毎日新しい誤りを吸収している人々から離れることが必要であることを見た。わたしは、若い者も年を取った者も、彼らの集会に出席すべきでないことを示された。それは、魂に致命的な毒である誤りを教え、教理を教えるかわりに人間の戒めを教える彼らを、このようにして奨励することは悪いことだからである。このような集会の影響はよくない。もし神が、このような暗黒と誤りから救い出してくださったならば、われわれは、神がお与えになった自由の中に固くたって、真理を喜んでいなければならない。神は、われわれが、行かなくてもよいのに誤りを聞きに行くのを、お喜びにならない。なぜなら、意志の力によって人々に誤りが強いられているこれらの集会に、神がわれわれをつかわされるのでないかぎり、神は、われわれを保護されないからである」（初代文集230-231）。

これらの警告があるにもかかわらず、我々の教会の指導者、教会員は、他教会から学んだ伝道の方法に何も疑問を感じることができないばかりか、これらの世的でエンターテイメント的な方法を教会の礼拝や伝道集会などに積極的に取り入れているのです。更に残念な事には、これらの方法に対して懸念を表明する人々に、超保守派などという呼び名を付けてしまうのです。**“なぜなのでしょうか？なぜ私たちは何も間違いが見えないのでしょうか？”**

たとえ、ゴスペル戦略なるものを支援している人であっても、教会に霊のリバイバルや新しい魂が加わる事を心から望んでいる人がいます。これらのエンターテイメント擁護者たちは、新しい魂を勝ち取り、青年達を教会にとどめておくためにも、神様は様々な形の楽しみを用いるだろうと信じさせられています。彼らの誠実な気持ちや動機は裁かず、なぜ私たちは最近の革新的といわれている方法に何も間違ったことが見られないのか、その他の理由を述べてみたいと思います。

１．あせり

主の証人であり、手本を示すべき指導者や親の立場にある者として、青年たちに納得させ、確信させるものを持っていません。私たちは、信仰の土台は当然聖書のみ、と主張していても、御言葉の神との生きた体験、証が見られないことを青年たちは観察しているのです。バプテスマは、キリストにある新しい生活の始まりというよりも、卒業式のようになりつつあります。神の残りの教会という私たちのアイデンティティーも、この世に神の使命を伝えるために奮い立たせるかわりに、ただ自己満足に陥るものになってしまっています。私たちは繰り返しこの教会は真理を持っていると主張しますが、多くの場合、真理が私たちの内に見られません。品性が変えられたことによる、深く魂を探る事や、謙虚さなしに、説教や伝道ではただ頭に知識を詰め込んでいるだけかもしれません。我々の社会問題に対する道徳的な立場も御言葉に忠実であるより、実利的な関心を示しています。そして私たちの礼拝が厳粛さと敬虔な雰囲気に満ちているかわりに、生きた神との交わりのない退屈な礼拝、または、感情的で表面的な礼拝のどちらかになってしまう傾向があるようです。

矛盾や偽善を見てきた多くの若者は、彼らが見抜いてしまった偽善的な信仰と隔たりを保っていなければ落ち着かない状態になってしまいます。けれども焦る両親や指導者は、何としてでも囲いの中に彼らを留めて置きたいがために、たとえそれが騒がしい音楽であろうと、手品であろうと、一時的なこの世の楽しみを彼らの為に取り入れてしまうのです。

ある方々は、これらの新しい形の礼拝や伝道は、聖書に従うクリスチャンには矛盾するという説明は、納得のいくものだと言われるかもしれません。けれども私たち自身の中にはこれらの方法に反対できるものを持っていないことに気づくのです。それは、私たちは皆、同じこの世の価値観を共有していて、実際のところ主の為の働きに何も携わることはありません。しかしながら、子供、青年たちには、教会活動に積極的に参加してほしいのです。けれども、ただ彼らが知っているのは、世の偶像を違う形で教会に持ち込む事なのです。

２．教会の指導者の弱さ

残念な事に、牧師や教会の指導者たちは、教会にこの世の、あるいは他教会の伝道や礼拝の方法を採用しないということを教会員から責められることがあります。指導者は時に教会の羊飼いとしての役目よりも、人気、仕事の保障、地位、そして外面的に見える成功を求め大切にしてしまうのです。そしてもし、教会内の世俗的な方法に反対しようものなら、敵を作りはしないか、又は自分の支持者を失いはしないかと恐れるのです。

会衆を意義のある伝道やリバイバルへ導くべきでありながら、それも途絶えているように見えます。聖書を土台としたメッセージを語ることはほとんどなくなり、そのかわりに曖昧で不明瞭な説教による無力感、停滞感といった雰囲気が漂い、私たちの教会は死にかけています。結果的に、伝道という名目で、革新的な礼拝の方法という名の下に、奇妙で誤ったものが教会に入ってきても、すでにそれらに立ち向かうための道徳的観念を失っているのです。私たちは真理にしっかりつかまって立っている勇気よりも、このおかしな流れに飛びついてしまう方が容易いことであることを見出すのです。

３．信仰の否定

他教会やこの世から、おかしな伝道の方法を取り入れても何も誤っていることがわからないという理由として、結果的に私たちは、神の言葉には人々をキリストに引き寄せ、その信仰にとどまらせる力があることを本心では信じていません。また、私たちの教会が聖書の預言にある残りの教会であり、他宗教の人々もこの世を愛していた諸教会から真理に立つために出てくる時が来る、ということを本心では信じていません。

このような視点を持っているのでは、私たちの教会は残りの教会ではなく、ただ残りの教会の一部に過ぎないということになります。たとえ安息日や、健康の法則といった教会の信仰の柱のいくつかを心から信じ受け入れていたとしても、私たちの教会のメッセージのユニークさ、他教会と異なるアイデンティティー、終末の希望と使命を伝える事の重要性を理解していません。

倫理的統合性（ethical　integrity）は次のように示唆しています。もし我々がアドベンチストの先駆者から受け継いでいる信仰にとどまることができず、アドベンチスト教会の存在意義を見失い、再びそこに戻る事ができないならば、教会組織からの雇用を辞職するべきです。けれども多くの人がそのようにする勇気がありません。私たちはしばしば、セブンスデー・アドベンチストに対して周囲の人たちから特徴づけられてしまう、“カルト”とか、“異端”というレッテルから抜け出したいと望むのです。そのために伝道の戦略方法として、世の中や他教会からの方法を積極的に取り入れてしまうのです。

４．中途半端な改心

これらのゴスペルの策略になんの疑問もなく、間違いが見えない他の理由として、私たちは今まで一度も真に改心、新生したという経験がないのです。私たちの好み、そして愛情はまだこの世にあります。ですからこれらの聖書的にあやしい革新案に対して、何も疑問が起こらないというのは、それが本当の正直な気持ちなのです。なぜなら霊のことは霊によってのみ理解することができるからです。

したがって、聖なる神に礼拝が捧げられる礼拝堂が、エンターテイメントの神を礼拝する舞台に変化しても、私たちは何も疑問に思わないのです。それよりもついには、現代人の要求に答えられる新しい教会のプログラムを考え出すことができたと、得意になって喜ぶかもしれません。私たちは、この世の神は盲目にする（2コリント4:4）ということに気が付きません。真の改心なしには、これらの世的な礼拝形式や伝道方法を用いることに反対するような心を与えられることは全く望めません。

世的なエンターテイメントで福音を伝える？

世の人々に福音を伝えるには、この世の人々の興味に合わせて、楽しめる（エンターテイメント）宣教方法を用いるべきだ、という意見をしばしば耳にします。けれどもこの言い分には少なくても二つの正当化できない重要な理由があります。

1）世俗的な方法はメッセージの重要性を失くしてしまう。

2）世俗的な方法は聖書の教えに反している。

１．メッセージの重要性を失くす

エンターテイメントの方法を使って真理を語る時に、たとえ実際に永遠の福音を宣教したとしても、聖書の重要なメッセージを取るに足らないような安物にしてしまうのです。エンターテイメントはエンターテイメントであり、一般の人々は、大切なメッセージを述べているのだということを真剣に受け止める人はいません。もし私たちがエンターテイメントのたぐいのもの、たとえば人形劇や、演劇、プレイズダンスその他を取り入れると、私たちのメッセージは聞き手の魂の中の本当の必要に答えることはできません。

もし、ロックミュージック（教会ではプレイズミュージックとかプレイズダンス等の呼び名で変装している）が今日の若者に接するために一番効果的な方法だということが真実ならば、なぜ数学の教師や科学の教授が彼らの教室にビートのかかった、踊りだしたくなるような音楽を使って授業をすることがないのでしょうか。なぜ政治家が手品師やサンタクロースでも雇って演説をさせないのでしょうか。

常識的に考えて、これらのエンターテイメントメディアは、重要なメッセージを伝えたいときには、信用性のある方法ではないのです。医師が不安げにしている患者に会いあなたは癌を患っているということを、悲しまないように騒々しい音楽を流しながら人形などに変装して伝えますか？もし医師が真剣に受け止めてほしい事があるのなら、このような種類の軽薄なものに頼ることをしないのは明白です。それでは滅び行くこの世に、審判や警告のメッセージを告げるために、このようなエンターテイメントの方法を使って訴える事が全く愚かなことだと思われないでしょうか。

イエス様は、山上の垂訓を語られた時、エンターテイメント類のものは何も使われませんで

した。ペテロはペンテコステの日、イエス様の復活や、天での即位式のことを人びとに話すのに、ドラムを用意したり、マリヤにダンスの指揮をお願いする事などありませんでした。そしてパウロも、アレオパゴスの評議所で手品を使って人びとを説得することなどしませんでした。

もし私たちが、ドラムやダンスや衣装やカフェや騒々しい音楽などが、聖の聖である神、そして失われた人類に対する神の憐れみを伝えるのに有効な方法であるというのなら、私たちは自己欺瞞に陥っているのです。これらの世的な方法に頼る私たちは、聖書の使徒たちが拝していた神ではなく、違う神に仕えているのです。

使徒パウロは、すぐれた福音宣教の方法について明白に述べています。「そこで神は、宣教の愚かさによって、信じる者を救うこととされたのである．．．神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからである」(1コリント1：21，25)。

２．聖書の教えに反する

私たちがこの世的な方法を使うときに、世は私たちのメッセージに注目するという考えは誤りです。新約聖書にあるように、キリストがこの世に来られた時に、この世は彼のことを知りませんでした（ヨハネ1:10）。彼はこの世のものではありませんでした（ヨハネ8:23）。聖書がこのように言っているのに、でも私たちは成功する事ができると、いったい何があなたをそう信じさせているのでしょうか。

イエス様御自身が、私がこの世のものでないように、クリスチャンはこの世のものではないと言っておられます(ヨハネ17:16)。彼は、この世のわざは悪だと強調して述べておられます(ヨハネ7:7)。彼は真の信者はこの世のものではなく、この世の悪から守られるように祈られました(ヨハネ17:14,15)。なぜなら神の霊は、この世の霊に反するからです(1コリント2:12)。福音はこの世の標準と同等の方法で人々に示すべきではありません。「あなたがたはこの世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである」(ローマ12:2)。

使徒は、世を友とするのは神への敵対であり、自らを神の敵とする（ヤコブ4:4）と言い、そして世は信者を汚す（ヤコブ1:27）と言っています。ですからクリスチャンは次のように力説しなければなりません。「世と世にあるものとを、愛してはいけない。もし、世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにない。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、持ち物の誇りは、父から出たものではなく、世から出たものである」(1ヨハネ2:15,16)。

私たちが今日、ゴスペルと名のついたエンターテイメントで真理を伝えることができると考えるのならば、私たちは聖書の教えから全く離れているのです。聖書はこの世は希望もなく、神もないと教えています(エペソ2:12)。それゆえこの世の人々に接するために、わざわざ他教会や世の方法を借りるのではなく、クリスチャンは、使徒パウロが言うように「彼らの目を開き、彼らを闇から光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ」（使徒行伝26:18）るために、世に派遣されるのです。

伝道のおとり作戦？

ほとんどの人、特に青年はストレートな福音を聞きたがらない、だから教会は彼らに楽しい催し物など何でも使って教会に興味を起こさせ、そして教会に足を運んでくれるようになったら、真理を語って教会にとどめることができるだろう、と考える人が多くいます。そして次の聖句を用いてこの方法が正しいことを証明しようとします。

「ユダヤ人には、ユダヤ人のようになった。ユダヤ人を得るためである。律法の下にある人には、私自身は律法の下にはないが、律法の下にある者のようになった。律法の下にある人を得るためである．．．弱い人には弱いものになった。弱い人を得るためである。すべての人に対しては、すべての人のようになった。なんとかして幾人かを救うためである」(1コリント9:20,22)。したがってある人の言い分は、我々は彼らに耳を傾けさせるためには、彼らが聞きたいもの、欲しているものは何でも与えなければならないというのです。

けれどもこの節の前後関係をみると、パウロは説教について述べているのであって、世的な伝道や、礼拝方法を使うように勧めているのではありません。彼はいつも聴衆の理解の程度に合わせてメッセージを語りました。言い換えれば、彼はいつも適切な事を語りました。ですからＩコリント９章で、パウロはえさで釣るような伝道方法を奨励しているわけではありません。反対に彼のように、神の言葉から説教するように勧めているのです。

さらに、終末時代の神の教会は、永遠の福音の宣教を神から委ねられました。この働きはとても大きな特権ですが、それと共に厳粛な責任と義務を伴うのです。それゆえパウロは、エンターテイメントのえさで釣って、それから教会に留めるというようなおとり作戦を、決して使うことがないように力説しているのです。彼は言っています。「いったい私たちの宣教は、**迷い**や、汚れた心から出たものでなく、**だましごと**でもない。かえって、わたしたちは神の信任を受けて福音を託されたので、人間に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を見分ける神に喜ばれるように福音を語るのである。わたしたちは、あなたがたが知っているように、決してへつらいの言葉を用いたこともなく、口実を設けて、むさぼったこともない。それは、神があかししてくださる」(1テサロニケ2:3-5)。

上記の聖句の、だましごと、迷い、という言葉に注目してください。第一にだましごとはギリシャ語で誤りと訳されます。すべての事がらの根本的、究極的な問いは、いつもそれが真実であるかということで、その福音は真理か、またはそうでないかということです。パウロは、真の福音を述べ伝えることに、彼の人生のすべてがかかっていました。現代は間違った基準に価値を置く傾向がみられ、それが真実であるか？との問いのかわりに、それは効果があるのか？という質問がもっと多く聞かれるようになってしまいました。教会に多くの人を集めたいがゆえに魅力的なものを用意し、そこに引き付けるのみの教えが危険なことは明白です。真理のための戦いや困難さに直面せず、とても効果が伴う方法というのは、往々にして正体を隠していることがあります。すべての説教、また聖書の教えを吟味するためのテストは、それが真実であるかということです。もしキリストの教えを、ただ単に私たちがこの世で成功し、幸せになるという事だけを教えているとすれば、神の福音に背くことになります。どんなにたくさんの人を教会に集める事に成功したとしても、偽りの罪に問われてしまうのです。

第二に、迷いはギリシャ語で、不誠実、えさ、狡猾、わな、おとり、などと訳されますが、伝道の働きに策略や、ごまかしなどが入ることはありえません。

私たちは福音を伝えることに決して不誠実な方法を使うべきではありません。Ｉコリント１章でパウロは、ユダヤ人に奇跡を見たいと求められた時、ギリシャ人がこの世の知恵を聞きたいと言った時、彼らの好みに沿うことはしませんでした。なぜなら、神が彼に福音を述べ伝えよと命じられたからです。最も効果的な福音宣教は、常に聖書に基づいている方法なのです。

青年たちの参加を奨励

青年たちに教会に興味を起こさせ、留めておくには、彼らの一番興味のあるエンターテイメントの方法を使うことだと主張する人々の他の言い分は、若い人々はたくさんのすばらしい才能を持っている、それゆえに教会はアドベンチストの若い先駆者が活動的であったように、現代の若者にも才能を発揮できる場を与えなければならない、そうでなければ彼らは教会に興味を失くし去ってしまうだろうというものです。

この言い分は正しいものではなく聖書的でもありません。多くのアドベンチストの先駆者が若かったのは事実です。たとえばジェームス・ホワイトは２３歳で説教を始め、エレン・ホワイトが幻を公に語りはじめたのは１７歳の時でした。Ｊ．Ｎ．アンドリューが伝道講演会を持ち始めたのは２１歳の時でした。そして２４歳の時にはすでに３５もの記事を出版していました。ユライア・スミスがレビューの編集者になったのは２３歳の時で、その時にはすでに“時と預言の警告の声”という連載を一年前から始めていました。これらの若い先駆者たちが今日の多くの若者と異なっていた点は、彼らは真に献身した熱心な聖書研究者で、主に仕えることに心は定まっていました。それゆえに、自分自身を世俗のエンターテイメントの方法に向けることはありませんでした。

今日の若者の多くがすばらしい才能を持っています。けれどもこの才能がどんなに特別な技能でも、霊的な礼拝や伝道に用いるということが必要なわけではありません。事実ある人がドラムを上手に演奏できても、またはダンスが上手に踊れてもこれは、私たちの礼拝にゴスペルロックや、プレイズダンスが必要と言うことでは全くありません。もしこの考えに従っていくと、私たちはゴスペルフットボール選手、ゴスペル野球のピッチャーなどの特別な才能を礼拝で用いなければならないということと同じ考えになってしまいます。それよりも私たちは、青年たちが真に改心し、神聖な礼拝の場に、彼らの才能を適切な方法で使う事ができるように、あまりにも早く霊的な傲慢さの危険に陥らせることがないように(Ｉテモテ3:6) 導いていかなければならないのです。

愚かな宣教ではなく、宣教の愚かさ

アドベンチストの伝道者カーライル・ヘインスは、神の言葉を中心にした説教と、この世の方法を用いた説教の違いを適切に表現しています。

ゴスペルという名の策略

数十年前に若い牧師たちに語っている言葉、ヘインスは次のように書いています：

「私は一度、業績においてとても評判の高い、有名なアドベンチストの伝道者によって開かれた集会に参加したことがある。若い牧師たちは、彼らの働きをもっと進展、向上させるための提案や勧告を、この牧師から受けていた。またある牧師たちは、この有名な牧師の方法を真似るために熱心に努力していた。私は宣教師として五年間海外へ行っていた。その間、魂の収穫の成功者と呼ばれていたこの牧師に関しての情報を受けていた。彼の伝道方法つまり彼の革新的な方法は話題の的になっていた。」

「私はこの説教者が使う方法を直接見て、学ぶ事ができるようとても熱心になっていた。運よく仕事の都合で、彼が伝道講演会を開く町に行くことになり、彼の説教や伝道方法を直接見る事ができるよう、集会に出席する計画を立てた。集会に出席する大勢の人々の流れに混じって、私は難なく説教者を見、話を聞くことができるよう会衆席の中央部に座った。」

「礼拝堂の照明はとても明るく立派に飾られていた。講壇の上にある垂木には、たくさんのライトが吊り下げられていた。左右には説教者に当てるためのスポットライトが置かれていた。」

「とてもとてもたくさんの音楽があった―楽器、ボーカル、コラール、ソロ、デュエット、コーテット、そして幼い二人の子供が可愛らしく可笑しく歌ったので、聴衆から笑いと拍手の的になっていた。その後、印象的なテーマソングを歌った。ほとんどの人が知っているようだったが、私は一度も聞いた事のない曲だった。歌の終わり頃、説教者は音もなく突然現れた。」

「彼は私を含めすべての人の注目を引いた。これは私には全く予想外であった。聴衆は彼に注目せざるを得なかった。すべての事が主催者の段取り通りに進行しているようだった。説教者はしみひとつない真っ白なスーツを着ており、白いネクタイ、白いソックス、白い靴で揃えていた。彼が持っている聖書までが白表紙であった。私の後ろに座っていた婦人は、興奮したように感嘆して同伴者に言っていた『彼ってすてきじゃない？！』私も同意せざるをえなかった。現れた瞬間から彼は注目の的だった。だれもが説教者の姿が立派ですばらしいという以外、何も考える事ができなかった。彼の言葉には僅かの注目しかなかったが、誰もが説教者から目を離すことはなかった。そして彼が眩しいスポットライトを浴びて動き回る度に、全会衆の頭も左右へと一斉に動いていた。」

「私は彼の言葉を聞いていなかったが、確かに彼を見ていた。なぜなら見ずにはいられなかった。それはとても印象的な演技だった。彼が何を語ったかわからない。それでも私が覚えていたことといえば、講壇の上で巧みに動き回る説教者の姿であった。」

「ホテルに戻り、説教者がどの聖句を読んだのかを思い出そうとした。私は彼が美しい白い聖書を開いたかどうかということさえ覚えていなかった。けれども確かに聖書を読んだはずだ、私が気がつかなかっただけに違いないと考えている間、ついにうとうとし始めた。最後に私の頭の中をよぎったことは、彼は確かにすばらしかったということだった。」

「その後の数ヶ月間の旅行中、白いスーツを装い、スポットライトを浴びるかなりの数の人々に偶然出くわした。それはまるで伝染病のようにあちらこちらに広まっていた。流行の病は自然の経過を辿ってやがては静まるものだ。そうであってほしい。」

「私はこのひとつの出来事をかいつまんで話した。なぜなら私がニューヨークで牧師をしていた時の他の経験と対比させたかったからだ。私は何年もの間、ロンドンのウエストミンスター教会の聖書解説者ジョージ・キャンベル・モーガンの伝道について聞いていた。彼は聖書総会のために毎年アメリカを訪れると聞いていた。だが私は彼の説教を聞いたことがなかった。しかしながら彼の本はすべて読んでいた。」

聖書的な説教

ヘインスの若い牧師たちへの勧告が続く：

「モーガン牧師が二週間の連続講演会の為、ニューヨークに来るという知らせに、私は喜びのうちに偉大な説教者の公演に、毎夜確実に出席できるよう計画を立てた。その集会は、月曜日の夜から始まる事になっていた。スタートの日にしては冴えない曜日を選んだものだと思った。」

「私は集会の始まる３０分前に教会に着いた。２５００席もある教会と知っていたので、席を確保する心配は全くしていなかった。けれども私は間違っていて、すでに空席は全くなかった。案内人は私を傍聴席に連れて行ってくれた。幸運な事にひとつだけ席が空いていたので安堵して席に着いた。２５００人を超える人々がこの月曜日の夜に出かけて来るとは、大変な驚きだった。」

「牧師と、モーガン牧師は講壇に静かに出てきて座った。会衆は昔なじみの古い賛美歌を歌った。歌っている途中、有名な説教者をまじまじと観察した。彼は背が高く、なんとなくぎこちなく、会衆がとても静かであったなら骨がカタカタと鳴る音まで聞こえそうな程ひょろっとしていた。彼の服装は質素で、人目を引くものは何も見られなかった。」

「牧師の祈りと簡単な説教者の紹介の後、モーガン牧師は講壇に立ち聖書を開いた（白い聖書ではなかった）。そして耳に心地よい声で、けれども演出など全くなく聖書を読み始めた。そしてすぐに説明を始めた。私は説教が始まる前に彼の外観を観察していて良かったと思った。なぜなら説教中には、彼の姿は全く目に入らなかったであろう。それに代わり、神の言葉という宝の箱から、彼が取り出したひとつひとつの貴重な説明に心を奪われ、我を忘れ聞き入っていた。それは私の人生の中で最も喜ばしい、そしてわくわくするような時間であった。以前は一度もこのような経験をしたことがなかった。そしてその経験は二週間の公演中毎夜続いた。」

「モーガン牧師は、魅力的な派手なジェスチャーも、見せ物や演技のような振りもなかった。そして彼は、チャート、黒板、絵、スクリーン、小道具やそれに類したものも何も使わなかった。彼の話、動き、服装、態度など彼自身に注目を引き付けるようなもの、又、聖書以外のものに注意を向けるものは何もなかった。」

「私は説教中、我を忘れて違う世界にいた。それは彼の話し方とか雄弁さとかによるものではなかった。彼はとても気さくで人に話しかけるような口調で話したが、彼がこれから探求する御言葉を読むときには、深い敬虔の念が伝わってきて感銘した。私が導かれたすばらしい聖書の世界以外の事、私の周りにいる人々、教会の事、説教者のこと、すべてを忘れ目にも入らなかった。」

「偉大な説教の源が聖書のみであること、その威力に驚異さえ感じ家路についた。」

「私はあなた方に銘記しておきたい、あなた方のだれもが、いつでもこの最も効果的な方法を使う事ができる。装飾品を手放しなさい、小細工の道具類を捨ててしまいなさい、見せびらかしを止め、エンターテイメントや舞台装置に頼ることを止めなさい。そして単純で、質素で、力強い御言葉を説く事にもう一度戻りなさい。」

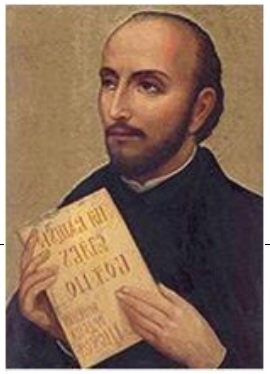
「モーガン牧師の集会の初日に帰宅し、深く心を動かされた私の心からあふれるように出た祈りの言葉は、『おお神よ、あなたの神聖な御言葉を説く説教者とならせてください、そしてそれ以外のものに決して頼ることがないようお助けください。』」1.

この祈りが我々の祈りにもなりますように。

引用文献：1．カーライル　B. ハイエン　“カーライル・ハイエン　若い牧師たちに語る”　サザンパブリッシングアソシエーションＰＰ. 31, 36.

特 報 1

イエズス会の日本戦略



イエズス会の策動　E.G.ホワイト

「このとき（ジュネーブにおいてファーレルとカルバンが宗教改革の旗を掲げた時）、改革事業に一大危機が訪れた。ジュネーブに対して法王の破門が宣言され、強国がこぞってジュネーブを威嚇した。これまでしばしば国王や皇帝を屈服させた強力な教権に、この小さい都市がどうして対抗することができようか。世界の偉大な征服者たちの軍隊に、どうして対抗できようか。

プロテスタント主義は、全キリスト教国において、恐るべき敵に脅かされた。改革事業の最初の勝利は過ぎ、ローマはその全滅を期して新たな勢力を奮い起こした。このとき、法王教の全闘士中、最も残酷で無法で強力なイエズス会が創設された。彼らは、世俗のきずなや人間関係から切り離され、人情も理性も良心もいっさいを無視して、彼らの会以外のどんな規則もきずなも認めず、ただ、その権力を伸張することだけを義務とした。キリストの福音は、その信者たちに、危険を冒し、苦難に耐え、寒さ、飢え、労苦、貧困にもめげず、真理の旗をかかげ、拷問も投獄も火刑も恐れない力を与えてきた。この勢力に対抗するために、イエズス会は、その会員を狂信的にさせ、同様の危険に耐えるように、またあらゆる欺瞞の武器をもって真理の力に対抗するようにさせた。彼らは、どんな犯罪を犯しても罪にならず、どんな欺瞞を行なってもかまわず、どんな偽装もわけなくできた。彼らは、一生の間貧困と質素な生活を送ることを誓ったが、その目的とするところは、富と権力の獲得であり、プロテスタント主義をくつがえし、法王至上権を復興することであった。

彼らは、会の会員として活動するときは聖衣をまとい、牢獄や病院を訪ねて病人や貧者に奉仕し、世俗を捨てたことを公言し、よい働きをしながら巡回されたイエスの清い名を帯びていた。しかし、この潔白な外観のかげに、しばしば、極悪非道な目的が隠されていた。目的は手段を正当化するというのが、会の基本原則であった。この規定によって、虚偽、盗み、偽証、暗殺などは、教会のために役立つならば許されるだけでなく、賞賛すべきものであった。さまざまな偽装のもとに、イエズス会の会員たちは、国政にまで手を伸ばし、国王の顧問の地位について、国家の政策をまとめた。また、人々の様子を探るために、そのしもべとなった。彼らは、王侯、貴族の子弟のための大学を設立し、一般の国民のための学校を建てた。そして、プロテスタントの親の子供たちは、カトリックの儀式を守るように影響された。ローマ・カトリックの礼拝の華麗な様子は、心を混乱させ、想像力を眩惑し魅惑した。こうして子供たちは、彼らの父たちが苦難と血によって得た自由を売り渡してしまった。イエズス会は、ヨーロッパに急速にひろがった。そして、彼らの行ったところは、どこでも法王権が勢力を回復した」（大争闘上293-294）。

その目的とするところは？

「富と権力の獲得であり、プロテスタント主義をくつがえし、法王至上権を復興することであった」(同294)。

1. 富の獲得
2. 権力の獲得
3. 法王至上権の復興

イエズス会の２面性

1. 徹底した善行、奉仕
2. 「最も残酷で無法」「極悪非道な」やり方

※　小生のところに送られてきた一冊の本がある。「恵みの風に帆をはって」ペテロ岐部と187殉教者物語である。「命に代えても、ゆずることのできないものがある」「勇気と優しさを生きぬいた人たちが現代に伝える希望の福音」日本カトリック司教協議会　列聖列福特別委員会発行。これ

は子供向けの本であるが、読者の涙をそそる美しい物語として描かれている。大争闘に次のように書いている：

「彼らは、世俗のきずなや人間関係から切り離され、人情も理性も良心もいっさいを無視して、彼らの会以外のどんな規則もきずなも認めず、ただ、その権力を伸張することだけを義務とした（付録参照）。キリストの福音は、その信者たちに、危険を冒し、苦難に耐え、寒さ、飢え、労苦、貧困にもめげず、真理の旗をかかげ、拷問も投獄も火刑も恐れない力を与えてきた」（同293）。

小生の手元に「Vatican Assasins」（バチカンの暗殺者たち）という本がある。

694ページにわたる分厚い本である。その中に日本とイエズス会のかかわりの翻訳がインターネット上で見つかったので、紹介したい。

◆日本人が知らない恐るべき真実研究ノートより。

イエズス会の正体

2006年9月27日

米国のプロテスタント派キリスト教徒エリック・ジョン・フエルプスの著書『バチカンの暗殺者たち』より引用します。（※この人は、E.G.ホワイト著の各時代の大争闘、聖書から多く引用ものせている）。

イエズス会の目的を想起せよ。彼らは極東、とりわけ日本の占領を企図した。まず最初に宣教師が来た。それから外国の軍隊がやってきた。

日本占領の意図をもってフランシスコ・ザビエルが1549年、日本に到着するとイエズス会士たちは“大名”と呼ばれる日本の貴族多数をキリスト教に改宗させた。イエズス会士たちはそれから大名たちを扇動して何百という仏教寺院を破壊せしめ、さらに仏教の僧侶たちを虐殺させた。

しかし、神の子（イエス・キリストのこと）は、ひとりのプロテスタント派キリスト教徒の船長を皇帝の将軍の宮廷に送った。ウイリアム・アダムスが、イエズス会士たちによって殺害されようとするその寸前に、将軍家康はアダムスを助け出した。家康は十分な時間をかけてこの船員アダムスと会談し、アダムスの話を聞いた。そこで家康はイエズス会の歴史が血にまみれていることを知った。西インド諸島原住民皆殺し、そしてスペインにおける異端審問についても。その結果、この英国人は、異例の恩寵を与えられ、武士に取り立てられた。

将軍家康は、そこで、イエズス会および彼らが構築したトレント公会議によって指導されるローマ・カトリック教会首脳部と法王の政治的行動計画に対して反撃することにした。すなわち、「家康は、その治世の最初から、彼の帝国を組織し、統合するとともに、彼の権力を外国の陰謀家たちに適切に対抗できるように建設した。1606年、彼はキリスト教布教活動禁止令およびキリスト教徒棄教令を公布した。家康の言うキリスト教徒はこの場合、ヴォルテールの“その土地土着原住民の政府を打倒してそこに宗派的支配権を打ち立てることを合図とするローマの悪名高き陰謀システム”を意味する」。

徳川将軍がこの事情を理解したので、家康、秀忠、家光はイエズス会士とその手先たち、スペイン人、ポルトガル人を追放した、プロテスタント派のオランダ人に1854年まで日本との貿易の独占権を与えた。1614年、家康は、彼の嫡子秀忠の名において、“キリスト教”を非合法化し、イエズス会を追放する法律を公布した。1622年、多数のイエズス会士が、国家反逆罪によって死に処せられた。

1624年、スペイン人、ローマ・カトリック教は、家光の命令によって禁止された。それはなぜか。

「切支丹（イエズス会）は、致命的に危険な教義を海外に広め、真実の宗教（仏教）を根絶し、（日本の）政府を打倒し、彼ら自身を全帝国（日本のこと）の主人たらしめるために策動して来た」。

彼ら(イエズス会)のねらいは何か？

イエズス会の目的は、中国の征服以下のものではあり得ない。そしてイエズス会の神父たちは、日本の支配者の車に乗って北京に入城する希望をずっと以前から抱いていた。

（徳川将軍の切支丹禁止令の結果として）イエズス会は、日本からその後250年間追放された。そしてその措置が日本民族に対して、技芸と、繁栄と、平和とをもたらした。

「将軍は彼の家紋も、日本の国家民族も、そのことのために手ひどい仕返しをされるであろうとは、ほとんど予知することが出来なかった！

常時謀略が企てられ、永遠に報復が仕掛けられる。1854年、イエズス会はペリー准将の率いるアメリカ艦隊を使って日本を開国させた。その古き敵に対して復讐するために、イエズス会は外国勢力を使って、1868年の革命を作り出した。徳川将軍は“権力を不法に簒奪した者”という悪名を付けられ、辞職するように強制され、徳川将軍家は15代で終焉した。

将軍家を追放した後、イエズス会は、天皇崇拝を復活させ、東京に、イエズス会の将棋の駒たる明治天皇を頂点とする中央集権国家を樹立した。

1873年、キリスト教禁止令が撤廃されるや、イエズス会は公式に日本への入国を許可された！1874年、イエズス会宿命の敵たる仏教は、正式にその特権を剥奪され、天皇はもはや、長年の国教であった仏教を保護することをやめた。

この新しい絶対権力をもって、1945年までその“教会の日本刀”を行使する。彼らは天皇の軍隊をもって、イエズス会の二つの旧敵、すなわち中国（1895年）、ロシア（1905年）に対する戦争を起こさせた。北京の満州王朝は1700年代にイエズス会を追放し、モスクワのロマノフ王朝の皇帝は1820年に同じことをしたではないか。

1941年、日本人が報復を受けるべき時が来た。ローマのイエズス会は総長の監督下で、東京のロヨラの息子たち（イエズス会の兵士たち）は、米国と日本の間の戦争を作り出す。フリーメーソン、シュライナー位階によるルーズベルト大統領が完全に承知している状況の中で、真珠湾は東条の日本艦隊によって爆撃される。そして、それは全米国民に惨劇の嵐を巻き起こす。（米国）議会は、この謀略にうまうまと嵌められて、対日宣戦布告を議決する。

天皇は、彼の絶対君主制を失った。太古からの文化を保有する日本は破壊され、日本人は国家的敗北の結果、未曾有の屈辱を受けた。そしてそれからイエズス会は、日本をハワイのように彼らのアメリカ帝国に併合し、その保護と繁栄が完璧にワシントンDCに従属する如き、社会主義的商業的植民地を造り出した。

親愛なる真実の探求者の皆さん。私の心は日本での過酷な拷問と死のもとに苦しんだアメリカ兵（私の父もそうであったが）のことを思うと断腸の思いに満たされる。硫黄島、ガダルカナル、タラワでの流血沙汰、そしてフィリッピンの奪回は、アメリカ海軍に決して忘れることのできない名誉を与えた。そしてその苦難は決して忘れられないであろう。彼らはプロテスタント憲法の下にアメリカの自由のために戦ったのではなく、ただイエズス会総長とよこしまなあのトレント会議の報復のために「偉大な神の栄光」のために戦っていたのであることを知ってほしかった。その神とは聖ペテロの椅子に座している神のことであることを覚えてほしい。」

まとめ：

１．1549年にフランシスコ・ザビエルが日本に上陸。南蛮貿易が始まった。

「日本では徹底して『上層部をつかむ』という布教を行っており、エリート層を握ることでバチカンの戦略を『上から』遂行しようとしている」赤間剛「バチカンの秘密」361。

「日本の貴族多数を改宗させ、大名たちを扇動して何百という仏教寺院を破壊せしめ、さらに仏教の僧侶たちを虐殺させた」。

２．戦国時代におけるイエズス会の関与

「ポルトガルとオランダが**諸大名に火薬を売りつけたために日本は戦国時代になった**。信長のキリシタン擁護が腰砕けになったため、宣教師は明智光秀に新式火薬を渡して、信長殺しに成功するが、そのうち秀吉の鎖国政策を嫌った宣教師たちは朝鮮征伐には火薬を供給せず、そのために秀吉の外征は失敗に終わる。しかし、このとき国内にいて火薬を温存させた徳川がのちに政権をとることができた。家康は火薬の流入が日本に戦乱を引き起こしたことを十分承知しており、鎖国の狙いはキリシタン禁制そのものでなく、火薬流入の禁止であった」鹿島昇の『昭和天皇の謎』。

３．織田信長とイエズス会

ポルトガルとオランダが諸大名に火薬を売りつけたために日本は戦国時代になる。

イエズス会に好意的であった。

１５４９年のザビエルによる日本開教以降、日本イエズス会は着実に日本における地歩を確立していった。１５７０年までに３万人の信者を獲得し、九州から畿内までの西日本各地に４０もの教会をたてた。ヴァリニャーノが来日した１５７９年までに信者は１０万人となっていた。在日イエズス会員の人数も、１５６５年に１２人だったのが、１５７９年に５５人、秀吉による宣教師追放令が発布された１５８７年には１１１人となっていた。高橋裕史著「日本のイエズス会」、「イエズス会の世界戦略」参照。

ニッケイ新聞　２００９年４月１６日付け
nikkeybr@nikkeyshimbun.com.br

日本人奴隷の謎を追って＝400年前に南米上陸か?!＝連載（５）＝売り渡したのも日本人＝晴天の霹靂、驚愕する秀吉より引用。

戦国大名・織田信長はイタリア人のイエズス会宣教師からアフリカ系奴隷を献上され、弥助（ヤスケ）と名付けて武士の身分を与え、家来にしたとの記録がある。フリー百科事典『ウィキペディア』によれば、現在のモザンビーク周辺出身の黒人だったようだ。

「元々は宣教師アレッサンドロ・ヴァリニャーノに仕える奴隷であったと言われている。天正九（1581）年、ヴァリニャーノが信長に謁見した際に連れられていたのが信長の目にとまった。信長は最初、肌の黒さが信じられず彼が身体に何か塗っているのかと思い、二月の寒空の下でたらいに入れて家来に体を念入りに洗わせたが肌が黒いままだった。肌の色の黒い人種がいることを理解した信長は彼に興味を持ちヴァリニャーノへ要望して献上させ、そのまま直臣になったと伝えられている。信長が彼を『ヤスケ』と名づけ武士の身分を与えて家臣とし衣食住不自由がないように取り計らってくれたことに大いに感謝し、忠実に仕えたと言われる」。

◆Wikipedia　記事検索：日本キリスト史より：

「織田信長６　信長と黒人武将「弥助（ヤスケ）」本能寺の変が起きると、「ヤスケ」も明智軍と戦いましたが信長に脱出をうながされ二条に向かいました。

二条城では信長の長男、信忠勢として戦い、多くの敵を倒したものの、捕らえられたといいます。

目の前に居る黒人を理解できない光秀は「ヤスケ」を「人ではないから殺すに及ばず」と言って、宣教師に引渡し国に返すように申し付けました。この家来は名を弥助(ヤスケ)といいましたが、そもそも、なぜ戦国時代に黒人が日本にいたのでしょうか。

黒人(ネグロイド)は、元々はアフリカ大陸を中心に暮らしていましたが、ヨーロッパ人からの侵略を受け、奴隷として徴用された歴史があります。徴用された黒人達は、ヨーロッパ人がその活動域を広げた時代、つまり大航海時代(15世紀中頃～17世紀中頃)に、ヨーロッパ人達の奴隷として、世界中の国に連れて行かれることになりました。

日本にも宣教師が黒人を連れてくることがあり、弥助もイエズス会の宣教師が奴隷として連れてきた黒人の一人でした。その後の「ヤスケ」がどうなったかは解りません。日本を離れた事だけは確実なようです。

織田信長にしても、その後継者である**豊臣秀吉**にしても、**当初はキリスト教の庇護者であった**。特に秀吉は一五九二年に朱印船貿易を始め、持ち込まれる希少品の数々に魅了されていた。

というのも、信長は仏教に対して不信感が強かった。反信長の急先鋒であった本願寺が、日本全国の一向一揆を動員して徹底的に抗戦し、苦しめたからだ。その力を削ごうと、異教の布教を許したと考えられている。

しかし、秀吉はキリスト教徒による仏教徒や神道徒迫害が増えたことを憂慮し、さらに1587年の九州平定を経て、日本人奴隷のありさまを見るにいたって、考え方を一変させる。

『近代世界と奴隷制：大西洋システムの中で』(池本幸三／布留川正博／下山晃共著、人文書院、1995年、158～160頁)には、次のような記述もある。

「南蛮人のもたらす珍奇な物産や新しい知識に誰よりも魅惑されていながら、実際の南蛮貿易が日本人の大量の奴隷化をもたらしている事実を目のあたりにして、秀吉は晴天の霹靂に見舞われたかのように怖れと怒りを抱く。秀吉の言動を伝え

る『九州御動座記』には当時の日本人奴隷の境遇が記録されているが、それは本書の本文でたどった黒人奴隷の境遇とまったくといって良いほど同等である。（中略）『バテレンどもは、諸宗を我邪宗に引き入れ、それのみならず日本人を数百男女によらず黒舟へ買い取り、手足に鉄の鎖を付けて舟底へ追い入れ、地獄の呵責にもすくれ（地獄の苦しみ以上に）、生きながらに皮をはぎ、只今世より畜生道有様』といった記述に、日本人奴隷貿易につきまとった悲惨さの一端をうかがい知ることができる」。

誰が売ったかといえば、それもまた日本人だった。『ブラジル史』でアンドウは「ポルトガルで奴隷として売られた日本人は、九州地方のキリシタン大名によって売られたものである」（63頁）と書く。

アフリカで黒人をポルトガル人に売り渡したのは、黒人自身であったが、日本においても同様のことが起きていたようだ。（つづく、深沢正雪記者）

大友宗麟（そうりん）が織田信長に鉄砲や火薬を仲介する商人の姿が書かれている。宗麟は貴族の久我晴通に、禁裏（天皇）へのバテレン優遇の奏上を依頼している。

九州のキリシタン大名大友宗麟は、カトリックの宣教師に煽動されて、永禄四年、宇佐八幡宮を焼いた。天正九年十月八日には、豊前彦山の三千坊といわれる坊舎を焼いたと。（251頁）

大友宗麟は、カトリックの極悪悪魔主義者たる宣教師と、ポルトガルの商人から、火薬の原料硝石を輸入するために、豊の国の神社仏閣を焼き払い、若い娘たちを奴隷として、売り払ったと。

このような人物こそ、日本史上極悪の民族への裏切り者、売国奴、国賊、として特筆大書され、徹底的に日本国民に教えなければならないのではないか。

しかし、大友宗麟のみでない。日本人キリスト教徒は、全員大友宗麟と同類の顕在的また潜在的な売国奴、ではないのか。

鬼塚著「天皇のロザリオ」が、今から、広く、日本民族有志によって熟読されるべきことを、再度訴えたい。

４．豊臣秀吉とイエズス会

秀吉は、最初は好意的であったが、後に憎悪に転ず。宣教師追放令、鎖国政策を始める。

◆Wikipedia記事検索日本キリスト教史より引用：

「しかし、秀吉の天下統一目前の1587年、九州征伐の途上で宣教師やキリシタン大名によって無数の神社や寺が焼かれ、仏教徒が迫害を受けているとの報告を聞き、激怒した。また秀吉は日本人が奴隷となって海外に売られている実態も知り、九州征伐完了直後、博多にて当時の布教責任者であるガスパール・コエリョを召喚して、当時ポルトガル商人によって行われていた日本人奴隷の貿易をやめ、海外の日本人を帰国させるよう命令する。

しかしコエリョは、奴隷をポルトガル商人に売る日本人が悪いと開き直り、日本人に対して行われた奴隷貿易を黙認した。宣教師達がポルトガル奴隷商人に対して「奴隷購買者破門令」を発布したのは、日本二十六聖人が殉教してから10年後の事であった。

この態度に激怒した秀吉は、懲罰的な意味から伴天連追放令を発した。コエリョは有馬晴信などキリシタン大名に秀吉と敵対するよう要請、さらに武器･弾薬の支援を約束した。有馬晴信は、既に天下人の座をほぼ手中に収めていた秀吉と敵対する気はなく、この要請は実現されなかった。以後、イエズス会は秀吉を刺激するのを恐れ、公の宣教活動をしばらく控えるようになる。

一方、秀吉は追放令を発布こそしたが、以後も実質上キリシタンは黙認したため迫害などはほぼ行われなかった。なぜなら秀吉はポルトガルを通じての南蛮貿易に積極的であったため、追放令の徹底を図らなかったと考えられている。そのため、宣教師達は立場こそ不安定だったものの、この時点ではまだかなり自由な宣教活動を続けていた。

しかし、豊臣政権の末期になってスペイン領であったフィリピンとのつながりが生まれ、フランシスコ会やドミニコ会などの修道会が来日するようになると事態は複雑化する。彼らは日本宣教において(社会的に影響力を持つ人々に積極的に宣教していくという)当時のイエズス会のやり方とは異なるアプローチを試み、貧しい人々の中へ入って

の直接宣教を試みた。けれども、これらの修道会がイエズス会のように日本文化に適応する政策をとらずに秀吉を刺激した(たとえば日本では服装によって判断されると考えたイエズス会員の方針と異なり、彼らは托鉢修道会としての質素な衣服にこだわった)ことや、イエズス会とこれら後発の修道会の対立が激化した事で、日本での宣教師の立場は徐々に悪化していく。

サン・フェリペ号事件(1596年)でスペイン人航海士が「キリスト教布教はスペインによる領土拡大の手段である」と発言したこと、日本人の奴隷貿易・人身売買とスペイン人や宣教師の関係が疑われたことなどから、宣教師とキリシタンの命運は決定的となった。秀吉は当時のキリスト教宣教の危険性を認識し、1597年には京都で活動していたフランシスコ会系の宣教師たちを捕らえるよう命じた。フランシスコ会は当時スペインの庇護によって活動していた。これが豊臣秀吉の指示による最初のキリスト教への迫害であり、司祭や信徒あわせて26人が長崎で処刑された(日本二十六聖人の殉教)。」

５．徳川家康とイエズス会

徳川家康は貿易継続。1600年に、豊後（今の大分県）に漂着した一隻の船があった。イギリスの**ウイリアム・アダムス**との出会い。彼はプロテスタントであった。家康の外交顧問として仕え、日本の女性と結婚し、武士とされ、三浦按針と名ずけられる。

三代将軍家光、鎖国の制度を確定し、250年間にわたる江戸幕府の基礎を築いた。

◆Maimaikaburi 2006年4月18日より；

キリシタン弾圧の本当の理由

「日本に来たザビエルなどのイエズス会の宣教師を純粋なカトリック教徒（キリシタン）だと考えると事の本質を見間違えてしまう。そもそもイエズス会とは、改宗ユダヤ教徒の影響下にあった集団だったのだ。それだけではない、ポルトガルやスペインが世界中に広がっていった時期カトリック教会はユダヤ人に操られていたのである。十字軍の遠征でさえユダヤ人によるエルサレムの奪還が目的だった可能性があるのだ。

奴隷売買や植民地からの搾取はイエズス会主導で行われた一大事業だった。しかし、そのことに戦国大名は気付いていた。始めにそれに気付いたのが織田信長であり、彼らから火薬を得るための取引はしたが、何れは（火薬の原産地を手に入れたら）切るつもりだった。そして秀吉の中国への侵攻は、スペインやポルトガルから日本を守るための派兵であった。その手始めとして秀吉はキリシタンの弾圧を行う。その理由はキリシタン大名が日本の女性を奴隷として火薬と交換する取引（その結果50万人がヨーロッパに連れ去られた）を始めたからだ。

つまりキリシタンはまさに外道だったのだ。火炙りで殺されるのも当たり前のことだったのだ。キリスト教徒に都合の悪い話は日本の歴史では一切出てこない（GHQなどによる歴史の改ざんである）が、イスラムの国では恐らく教えているのだろう。

何も罪のない人達を殺すほど信長や秀吉は狂ってはいなかった。国内における延暦寺や一向宗に対する焼き打ちも理由は同じだったのだ。寺社が穏健になったのは信長の統治以降なのである。」

結論：

キリシタンによって多くの女性が奴隷（性の）としてヨーロッパに送られた事は歴史の表には出てこない。だから何故あんな弾圧が行われたのかが分からなくなってしまうのだ。だからと言って、今キリスト教徒を弾圧しろと言う話ではない（それでは韓国になってしまう）。ただ、そういう過去があったのでキリシタンに対する弾圧があったのだと教えなければいけないと言う事なのだ。そしてザビエルはキリスト教徒にとって聖人かもしれないが、善人だったわけではないのである。そしてヨーロッパ人は改宗ユダヤ人の行ってきたことを知っているので未だにユダヤ人は差別

されているのである。さて貴方はこの話を信じますか？」

6．1854年イエズス会、ペリー艦隊を送る

イエズス会はペリー准将の率いるアメリカ艦隊を使って日本を開国させた。

7．1868年7月 ええじゃないか騒動

ええじゃないかは、日本の江戸時代末期の慶応3年（1867年）7月から翌明治元年（1868年）4月にかけて、東海道、畿内を中心に、江戸から四国に広がった社会現象である。天から御札（神符）が降ってくる、これは慶事の前触れだ、という話が広まるとともに、民衆が仮装するなどして囃子言葉の「ええじゃないか」等を連呼しながら集団で町々を巡って熱狂的に酒とで昼も夜も踊りまくった。フリーメーソンの自由、平等、博愛の波が押し寄せてきた（フリーメーソンの上にイルミナチ、その上の最高院にイエズス会が君臨していることを覚えなければならない。）

8．1913年、イエズス会の上智大学が国会議事堂の最も近くに設立された。

9．そして2008年２月、イエズス会の総長に上智大学で組織神学を教えたニコラス神父が選ばれる！

……

ここまで許した日本はどうなるのだろうか？

「彼らが行ったところはどこでも法王権が勢力を回復した」（大争闘上294）。

左がベネディクト16世。右が新総長ニコラス神父（イエズス会ホームページ（スペイン語版）より）

ニコラス総長の会談風景

イエズス会トップに日本通　ニコラス神父を総長に選出

2008.1.20 00:57

このニュースのトピックス：宗教

カトリック教の男子修道会で、宣教師フランシスコ・ザビエルを日本に派遣したことでも知られるイエズス会は19日、総会を開き、トップである総長に、同会の日本管区長を務め日本通で知られるアドルフォ・ニコラス神父（71）を選出した。ANSA通信が伝えた。同神父は上智大学で神学を教えた経験もある。

バチカン関係者によると、総会はコルベンバッハ総長が引退を表明したことを受け行われ、世界からローマに集まった217人の会代表が投票、2回目にニコラス神父が選出に必要な過半数の票を得たという。

ニコラス神父は1936年スペイン生まれ。日本のほかマニラなど東アジアで布教・教育活動に長く携わった。（共同）

あの有名なインサイダーであり、「血の鍵」の著者マラキ＝マーチンによれば、現時点ではイエズス会総長がローマ法王に命令する上位の立場にあるという。「ブラックポープ＝闇の法王」とも言われている。

特 報 2

キリスト教が日本に最初に伝わったのは ザビエルの来日、1549年ではない！

キリスト教が日本に最初に伝わったのはザビエルの来日、1549年ではない！

そんな，「日本史」の常識を根底から覆すような，すごいことを述べていたのは，早稲田大学名誉博士の佐伯好郎 博士である。

・インドには，西暦52年

・中国には，西暦61年頃

・日本には，西暦198年か199年

日本に最初にキリスト教が伝わったのは，西暦二世紀（199年）のことである。

インタネットで拾った記事を紹介しよう：

ザビエル以前のキリスト教―景教―」「聖書雑学」より：

要約：

日本の「福音派」の教職者らによって書かれた「新キリスト教辞典」の、「日本の宣教史」という項目の最初の出だしには、こう書かれています。

「1. ローマ・カトリックによる宣教。(1) ハビエル来日から秀吉による禁令まで（1549―87年）日本に初めてキリスト教を伝えたのは、ローマ・カトリック教会のイエズス会士、フランシスコ・ハビエル（ザビエル）でした。彼は1549年、マラッカで出会った日本人ヤジロウを伴い、日本宣教の大きな幻を抱いて鹿児島に上陸した。当時の日本は戦国時代の末期に当り、・・・云々」（「新キリスト教辞典」いのちのことば社、1991年。982ページ。）

学校の教科書も、先生方も、そして、キリスト教会の教職者や牧師も、みんなそう教えている。

マタイ28：19,20や使徒1：8のイエスの命令を受けて弟子たちは、ユダヤ、サマリヤ、そして全世界の果てにイエスの教えを聖霊の力で述べ伝えていきました。

パウロは「この福音は、天の下にあるすべての造られたものに対して宣べ伝えられた」と言っています。

歴史を調べてみますと、イエスの弟子たちは、ただ「西の方角」（西洋）へ伝道に行っただけではないということがわかります。彼らは実は、「東の方面」（東洋）にも向かいました。

学者たちによると、インドには、西暦52年に、キリスト教の宣教師が存在したという証拠があるそうです。（久保有政＋ケン・ジョセフ著「日本・ユダヤ封印の古代史２【仏教・景教篇】」徳間書店、2000年。28ページ。ケン・ジョセフ　Sr.&Jr.著「〔隠された〕十字架の国・日本」徳間書店、2000年。30ページ。）

たとえば、「アジア伝道史」という本には、「インド西岸に分布するマラバル教会は使徒トマスによって開かれたという伝承があり、現地ではそう信じられています。トマスの到着は五二年と伝えられています。云々」（渡辺信夫著「アジア伝道史」いのちのことば社、1996年。59ページ）と書かれています。

「伝承」によれば、使徒トマス（別名「デドモ」、“双子”の意）は東に向かいました。

研究家、バル・オーライの記すところによれば、トマスは、イエスが昇天されてからわずか2年後（つまり、西暦35年）には、すでにアッシリア地域で伝道していたそうです。

アッシリア東方基督教会では、伝統的に、トマスは「初代の大主教」と呼ばれている。彼らにとっては、使徒トマスこそ、「自分たちに最初にキリスト教をもたらしてくれた人物」であり、それゆえに、今でも、トマスは彼らから深く尊敬されていました。

また、トマスはその後、インド南西部のケララ州（ケララのマラバル海岸。インド半島南西部のアラビア海に面する海岸）に伝道に行きました。

日本仏教の歴史的描写」の著者である、アーサー・ロイド博士は、その点を詳しく調べ、「トマスのインド伝道は疑う余地なし」との結論を出しています。

ロイド博士の研究によりますと、トマスは、インドのクランガモールのマーランカラに上陸し、その地で多くの人々に洗礼（バプテスマ）を施し、7つの教会（会衆）を建て、2人の司祭（長老）を任命しました。四世紀の宗教史家エウセビオス（260年頃～340年頃の教父）は、クリスチャンの使徒トマスが、一世紀にキリスト教をインドに伝えたと述べています。

「広辞苑」第五版（岩波書店、1998年）は、「トマス」の項目で、次のように説明しています。

「トマス【Thomas】キリスト教の聖者。イエス十二使徒の一人。伝説に、インドに渡ったといわれ、その言行は「トマス行伝」に描かれる。トーマ。」

（注：ここで言う「トマス行伝」とは、いわゆる「新約聖書外典」の一つで、西暦三世紀前半に、エデッサ（現ウルファ、トルコ南東部）で、グノーシス派に属する人物によって書かれたと思われる書物です。

この「トマス行伝」を、じかに読んでみたいと思われる方は、荒井献偏「新約聖書外典」講談社文芸文庫、

1997年。275～408ページ。「使徒ユダ・トマスの行伝」をご覧下さい。その「使徒ユダ・トマスの行伝」は、トマスの十三の行録と一つの殉教物語から成っています。その第一行伝は、「彼（主）が彼を商人ハバンに売り、彼が下って、インドを悔改めさせたときのこと」という言葉で始まり、第二行伝は、「使徒トマスがインドに入り、王のために天上に宮殿を建てたこと」という言葉で始まっています。）

さらに、伝承によれば、トマスはまたその後、中国にも伝道に行った、とのことです。だいたい今の北京（ペキン）あたりまで行き、信者を作って教会（会衆）を建てたと言われています。

しかし、再び、トマスはインドに戻って伝道し、西暦68年から75年ごろ（ある人によれば、「西暦七二年」）、バラモン教徒の手にかかって殉教したと言われています。

（「日本・ユダヤ封印の古代史2【仏教・景教篇】」徳間書店、2000年。29ページ参照。ケン・ジョセフSr.&Jr.著「〔隠された〕十字架の国・日本」徳間書店、2000年。30ページ。）

（注：トマスが中国にも伝道に行ったのが、もし本当だとすれば、当然、中国には、彼が殉教するよりも前に（遅くとも、西暦75年以前に）キリスト教が伝わっていたことになります。）

彼の遺体は、南インドのメリアポール（または、ミラポール。今のマドラス。1996年には、「チェンナイ」に改名）に葬られたらしく、テオドラという人物（西暦五世紀）は、フランスのクールの監督グレゴリーに対して、「南インドのメリアポールにトマスの墓があった」と伝えています。

また、一三世紀のマルコ・ポーロの日記には、預言者の墓、またはアベリア（「聖人」の意）の墓と呼んでいる」と記されているそうです。

マルコ・ポーロが、西洋の人に初めて「日本」という国を、黄金の国「ジパング」（チパング島）として紹介した有名な「東方見聞録」（1298年成立。当時の「ジパング」は、鎌倉時代）にも、インドのマラバル海岸（マアバル地方）に関する説明の部分で、トマスの伝道や殉教のいきさつ、トマスの墓がそこにあることなどについて言及されています。こう記されています。

「聖トーマスの墓はマアバル地方の一都市にある…」

「使徒聖トーマスの遺骸は、マアバル地方の人の少ない小さな町におかれている。そこは産物もゆたかでなく、不便なところなので、商人もあまり行かない。しかしキリスト教徒もイスラム教徒も大分参詣にゆく。イスラム教徒が行くのは、彼をイスラム教の大予言者と考えているからで、彼をアヴァリアンすなわち聖者とよんでいる。…（中略）

聖トーマス教会の管理者はたくさんのインド胡桃〔やし〕を栽培し、これで生活して・・・いる。彼の話によると、この聖者の死んだときの有様はつぎのようである。ある日聖トーマスは隠遁所をでて、森の中で祈祷をしていた。・・・ゴヴィ族の偶像崇拝教徒が弓をもって通りかかり、聖者の姿が見えないのを幸いに、矢を孔雀にはなったが、それは聖者の右脇腹にあたり、傷のため、彼は霊魂を神に託したのであった。彼はここにくる前、ヌビアにすみ、多くの人をキリストの信仰に改宗させた。」（マルコ・ポーロ述／ルスティケロ著。青木富太郎訳「東方見聞録」現代教養文庫、1969年。184, 188, 189ページ。）

このトマスの伝道の結果、インドではクリスチャン人口は増えつづけ、少数派ではありましたが、それでも「1000人のうち10人」の割合を、クリスチャンが占めていたといいます。

そして、トマスがインドに良いたよりを伝えてから、およそ1400年余りたってから、ローマ・カトリック教徒であるポルトガルの植民地開拓者たちが、バスコ・ダ・ガマに率いられてケララ州に着いた時、彼らは、すでにキリストを信じている人がそこに大勢いるのを知って驚いたといわれています。

この、トマスがインドに伝道に行ったということは、その昔、NHKの番組「シルクロード」の中でも取り上げられました。その番組によれば、インドのケララ州においては、人口のいまだ「5分の1」がキリスト教徒であり、彼らは自分たちのことを「トマ（トマス）の子」と名乗っているそうです。

（久保有政＋ケン・ジョセフ著「日本・ユダヤ封印の古代史2【仏教・景教篇】」徳間書店、2000年。106ページ）。

また、その同じ本の80ページによれば、「住民の約二五パーセント」が基督教徒だと言われています。その場合、人口の4分の1。

一方、インド全体では、約0.3パーセント。全人口の9億8,923万人（1999年現在）のうち、キリスト教徒はわずか300万人だけ。他は、ヒンズー教徒、イスラム教徒、シーク教徒などが占める。）

そして、今でも、そこには、トマスが建てたと言われる（または、使徒トマスを記念して建てた）教会堂も現存しているそうです。現地の人はそれを、アラム語で「マル・トマ」教会と呼んでいるそうです。　「マル」とは、「聖」（または、「先生」）という意味で、「トマ」とは、もちろん、「トマス」という意味です。つまり、その教会の名は、「聖トマス」教会という名前なのです。（久保有政＋ケン・ジョセフ著「日本・ユダヤ封印の古代史2【仏教・景教篇】」徳間書店、2000年。29, 63ページ。　ケン・ジョセフ　Sr.&Jr.著「〔隠された〕十字架の国・日本」徳間書店、2000年。31, 47ページ。）

「新聖書辞典」は、「トマス」という項目で、その「聖トマス教会」に言及し、次のように述べています。「シリヤ語を話す教会の間では、トマスは主イエスのふたごの兄弟の一人であり、ユダ（マコ6：3）と同一視する説があった。その後のトマスについては、ペルシヤに宣教したとか、インドで宣教し、そこで殉教したとかの伝承が伝えられている。現在も、インドの聖トマス教会は、トマスの宣教によって設立された教会の継承と主張している。」（「新聖書辞典」いのちのことば社、1985年。893ページ。）

「新キリスト教辞典」も、「世界と教会と神学」という項目の中で、「インドの教会」について説明し、次のように述べています。

「（7）インドの教会。インドのキリスト教の起源は、3世紀にさかのぼる。使徒トマスがインドに来たという伝説はインドの教会で決して弱くならない。インドの西南マラバールにはトマス・キリスト教として知られるマール・トマ・シリア・マラバール教会がある。」（「新キリスト教辞

典」いのちのことば社、1991年。805ページ。）

この点に関しては、有名な賀川豊彦（かがわとよひこ）も、その著「神に就いての瞑想」の中で、次のように述べています。（「現代語」に替えてあります。）「世界のキリスト教は二つの分派を持ち、東と西に伝播した。

一つは、弟子トマスがインドに持っていった。紀元一世紀にキリスト教がインドに入ったと言えば、ウソだと言う人があるかも知れないが、インドにはシリヤ教会がある。この教会は確かに、イエス・キリストの弟子トマスが伝道した教会で、1900年の間眠っていたのであるが、最近50万人位の勢力を持ち復活してきた。」（「かがわ - とよひこ【賀川豊彦】「キリスト教社会運動家。神戸の人。神戸貧民街の伝道をはじめ、関西の友愛会の指導者となり、農民組合・消費組合運動にも関係。第二次大戦後は伝道・生活協同組合運動・世界連邦運動に尽力。小説「死線を越えて」。（1888〜1960）」「広辞苑」第五版。岩波書店、1998年）

……

また、同じく、イエスの十二弟子の一人、使徒タダイ（聖書の別の箇所では、「ヤコブの子ユダ」または、「イスカリオテでないユダ」と呼ばれている。アラム語では、「アダイ」）は、アッシリア地方の古都エデッサ（現ウルファ、トルコ南東部）や、パルテヤ地域（カスピ海南東）に行って、良いたより（福音）を伝えたようです。

四世紀の歴史家が、過去の文献を引用してそう記した文章が残っているそうです。（ケン・ジョセフ Sr.&Jr.著「〔隠された〕十字架の国・日本」徳間書店、2000年。32，151，160ページ。）

その後、エデッサは東方キリスト教の中心地として栄えました。

西暦95年には、その地域には19の都市に、キリスト教の主教がいたようです。

また、西暦161年には、メディヤ、ペルシャ、バクトリヤなどのアッシリア地方には、広くキリスト教が伝わっていたことが知られています。

そののち、西暦五世紀になりますと、「景教」と呼ばれるキリスト教の一派が、このアッシリア地域で栄えました。そしてさらに東方へ広がっていったのです。（久保有政＋ケン・ジョセフ著「日本・ユダヤ封印の古代史2【仏教・景教篇】」徳間書店、2000年。40，43〜46ページ。　ケン・ジョセフ Sr.&Jr.著「〔隠された〕十字架の国・日本」徳間書店、2000年。37，156ページ。）

彼らは中国に達し、「唐」の時代（618年〜907年）、巨大な景教の寺（教会）がどの省にも建てられたようです。（けい - きょう【景教】とは、「光り輝く教え」の意）ネストリウス派キリスト教の中国での呼称。唐代に中国に伝わり、唐朝が保護したために隆盛、唐末に至ってほとんど滅亡。後また、モンゴル民族の興隆と共に興ったが、元ゲンと共に衰滅。」「広辞苑」第五版。岩波書店、1998年。）

そして、彼らはそののち、この日本にもやって来ました！しかし、初期のクリスチャンたちについて詳しく研究した学者たちによれば、それ以前にも、すでに、中国には、西暦61年ごろ、日本には、西暦198年か199年に、キリスト教の宣教師が存在したという証拠があるそうです。（トマスに限らず、キリスト教の宣教師によって、西暦一世紀中に、中国やチベットにキリスト教が伝えられていたことを示すさらに詳しい証拠に関しては、久保有政＋ケン・ジョセフ著「日本・ユダヤ封印の古代史2【仏教・景教篇】」徳間書店、2000年。36〜38ページ。および、ケン・ジョセフSr.&Jr.著「〔隠された〕十字架の国・日本」徳間書店、2000年。36，61ページをご覧ください。）

ここで興味深いのは、中国に宣教師がもうすでに存在したと報告されているこの西暦61年という年は、使徒パウロが、「コロサイ人への手紙」1章23節において、良いたよりは、「天下の全創造物」新世界訳（「世界中至るところの人々」新共同訳）の中で宣べ伝えられた（「宣べ伝えられている」新改訳）と書いたのとほぼ同じ年です。（注：この、「コロサイ人への手紙」の執筆の場所と年代に関して、「新聖書辞典」は、こう注解しています。「コロサイ人への手紙・・・（中略）

……

さて、西暦198年か199年ごろ（西暦二世紀）の日本には、もうすでにキリスト教の宣教師がいた、というのが“もし”「事実」だとすれば、・・・ザビエルが1549年に、ローマ・カトリックの教えを伝えるよりも、およそ1300年以上も前に、日本人はすでに、キリスト教に接していたということになります。

そして、今や、21世紀に入った現在の時点からは、およそ、1800年も前に、「キリスト教」は、この日本に伝わっていたということになります。そうです。現代（主に、明治以降と戦後）になって、「アメリカ」を主とする“西洋まわり”のキリスト教が伝えられるよりもずっと前に、“東洋まわり”のキリスト教が、それも西暦二世紀という早い段階で、もうすでにこの日本には伝えられていた“可能性”があるのです！

それは、西暦六世紀（西暦538年）に、仏教がこの日本に伝来するよりも、はるか以前の話なのです。

実を結ばないやみの行為（企て）にいっさい参加しては（交わりを持っては）いけません。むしろ、それらをあばく（非難する〈有罪とする〉〔ほどに、あなたがたの生活を対比的なものとしなさい。〕エペソ5:11
祥訳聖書

And have no fellowship with the unfruitful works of darkness, but rather reprove [them].　（ＫＪＶ）

“Expose”□(NKJV)

Column

堕落した諸教会はバビロンと呼ばれている

「謙遜に神と共に歩むことが我々の個人的責任である。我々はいかなる新奇なメッセージをも求めるべきではない。光のうちを歩もうとしている神の選ばれた者たちが、バビロンを構成する人たちだと考えるべきではない。堕落した諸教会がバビロンである。バビロンは有毒な教理、すなわち誤謬のぶどう酒を育成している。この誤謬のぶどう酒は、霊魂不滅、悪人の永遠の責苦、ベツレヘムの生誕に先立つキリストの先在の否定、神の聖日よりも週の第一日目を擁護し、高揚することといった偽りの教理で構成されている。こういった種々の誤りが、様々な教会によって世に提示されている。こうして『倒れた、大いなるバビロンは倒れた。その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者』という聖句が成就している」（TM61）。

上記の他に、字義通りの再臨を信じない教会もあれば、掲挙（ラプチャー）を信じる教会もある。また、再臨前に全世界が改心する福千年説、健康改革の使命の否定、まがいものの信仰による義認（初代文集391）、再臨前調査審判―罪の除去の否定、灌水洗礼等々の非聖書的教えを説くプロテスタント教会がある。

大争闘と初代文集によると、キリスト教諸教会のことを次のように表現している：

- 一般諸教会は、第一天使の使命を拒んでバビロンとなった。
- 道徳的堕落に陥った。宗教改革以後、ひどく堕落してしまった。
- 霊的暗黒と神からの離反に陥ってしまった。
- 真理からますます遠く離れ、世俗と一層密接に結合した。
- 天からの光を拒否し、神の恵みを失った。彼らは自分たち自身の力に頼った。
- プロテスタント教会は大いなる暗黒にある。
- 今日プロテスタントは法王制を尊敬している。嫌悪感を失った。余計な手出しをして後援している。
- プロテスタント諸教会は世の関心を求めたために、誤った愛がその目を見えなくしている。
- 率先して心霊術と手を結び、深淵を超えてローマと握手している。
- それでも神の民は多くバビロンにいる。
- 我々のメッセージは「わが民よ、彼女から離れ去れ、出てきなさい」である。

エキュメニカル運動は教会合同運動、一致運動と呼ばれている。カトリック側から言わせたら「再帰運動」である。明らかに聖書の教えに反する運動である。

「二人の者が同意しなければ、一緒に歩くことができるだろうか」（アモス3:3欽定訳）。

「不信者と、つり合わないくびきを共にするな。義と不義となんの係わりがあるか。光とやみとなんの交わりがあるか。キリストとベリアルとなんの調和があるか。信仰と不信仰となんの関係があるか。神の宮と偶像となんの一致があるか。わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、『わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう』。だから、『彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触れてはならない。触れなければ、わたしはあなたがたを受けいれよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる』」（2コリント6：14-18）。

「わたしはまた、もうひとつの声が天から出るのを聞いた、『わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ』」（黙示録18：4）。

「バビロンで表わされている諸教会は、霊的に堕落した状態にあり、神の戒めを守り、イエス・キリストの証を持つ者たちを迫害するものとなるのである」（TM117）。

しかし、神の民は、多くバビロン教会にいる：

「バビロンは、『淫婦どもの母』であると言われている。その娘たちとは、彼女の教義と言い伝えを重んじてその例にならい、世との不法な同盟を結ぶために、真理と神の是認とを犠牲にする諸教会の象徴でなければならない。バビロンが倒れたことを宣言する黙示録14章のメッセージは、か

つては純潔であったが腐敗するに至った宗教団体に適用されねばならない。このメッセージは審判の警告に続くものであるから、最後の時代に発せられるものでなければならない。したがって、これは、ローマ・カトリック教会だけに当てはまるものではない。なぜならば、この教会は、幾世紀にわたって倒れた状態にあったからである。さらに、黙示録一八章では、神の民はバビロンから離れ去れと呼びかけられている。この聖句によれば、多くの神の民がまだバビロンにいなければならない。今、キリストに従うものの大部分は、どの宗教団体に属しているであろうか。言うまでもなく、プロテスタント各派の諸教会である」（大争闘下84）。

「黙示録１８章は、教会が、黙示録14:6-12の三重の使命を拒否した結果、第二天使の使命が預言した状態に完全に陥り、そして、まだバビロンにいる神の民が、その中から出るようにと求められる時を示している。これは、世界に発せられる最後の器である。そしてそれは、その働きを成し遂げる。『真理を信じないで議を喜んでいた』人々は、偽りを信じ、迷わす力に陥るままにされる（テサロニケ第二・2:12）。そのとき真理の光は、それを受けようと心を開くすべての人の上に輝き、バビロンに残っている主の子供たちはみな、『わたしの民よ。彼女から離れ去』れという招きの声に耳を傾けるのである（黙示録18:4）」（大争闘下93）。

「あらしが迫って来るとき、第三天使の使命を信じると公言していながら、真理に従うことによって清められていなかった**多くの者（大部分の者）**が、その信仰（立場）を棄てて反対の側に加わる。彼らは、世俗と結合し、その精神を抱くことによって、ほとんど同じ見方で物事を見るようになっている。そして、試練が来ると、彼らはすぐに、安易で一般うけのする側を選ぶのである。かつては真理を喜んだところの、才能ある雄弁な人々は、その力を用いて他の人々を欺き迷わす。彼らは、以前の兄弟たちにとって、最も苦い敵となる」（大争闘下378）。

ちっとも変わらないのはどうして

しばしば、次のような疑問が起こる。では、神のことばを信じると言っている人の、ことばにも、精神にも、品性にも改革が見られないのは、いったいどうしたことであろうか。自分がよく考えて計画したことに対する反対があったりすると、がまんできずに、ついに短気を起こし、するどい激しいことばを口にするものが多いのはなぜであろうか。また、彼らの生活には、世俗の人が持っているのと同じ利己心、放縦、短気、はげしいことばがみられる。彼らは、真理を全く知らないかのように、世人と同じ傷つきやすい誇り、同じ生来の傾向、同じ品性のゆがみをもっている。というのは、彼らが悔い改めていないからである。彼らは真理のパン種を持っていない。パン種は、まだその仕事を始める機会がないのである。彼らの先天的および後天的の悪への傾向が、パン種の改変力に屈服していないのである。彼らの生活は、キリストの恵みに欠けていることと、品性を改変するキリストの力を信じていないことをあらわしている。

「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」（ローマ10：17）。聖書は、品性を改変する大きな能力である。「真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります」とキリストは祈られた（ヨハネ17：17）。神のことばを学んで従うならば、それは、心の中で活動を始め、すべての清くない性質を征服する。また、聖霊が降下して、罪を指摘する。すると、心の中に生じた信仰は、キリストに対する愛によって活動しはじめ、からだも心も魂も、すべてをキリストのかたちに一致させるのである。こうして神は、み心を行なうためにわたしたちをお用いになるのである。与えられた力は、内から外へと作用して、わたしたちに伝えられた真理を他に伝えさせるのである。

神のみことばの真理は、人間が持っている大きな必要を満たすもので、信仰によって魂を改心させるものである。これは、あまりにも崇高な原則であるから、日常生活にあてはめるには、清く、神聖すぎるものであると考えてはならない。こうした真理は、天にまで達し、永遠に及ぶものでありながら、その生きた感化は、人間経験の中に織り込まれなければならないものである。それは人生の大事、小事を問わず、どんな事の中にもしみ通って行かなければならない。

真理のパン種が心にはいると、欲望を制し、思想を清め、性質を美しくする。知力と精神力を活発にする。感情と愛情も豊富にされる。こうした原則に従おうとする人を、世は不思議に思う。

キリストの実物教訓73-74頁

STORY

エディ婦人とジャックじいさん

訳　砂川　満

道ばたに寝ていた男はゆっくりと顔を上げた。見ると、上品そうな婦人が立っていた。新品の上等なコートを着ている。生まれてこの方、食に困る経験とは無縁であったような外見である。最初、「この女は俺をからかおうとしているんだろう」といった思いが男のうちによぎった。他人〔ひと〕から馬鹿にされるのは、もうすっかり慣れっこになっている。

「ほっといてくれ」と男は不機嫌そうに言った。ところが驚くことに、そう言われても婦人はその場に立ったままである。彼女はニコニコしていた。微笑みの奥で、白い歯が輝いていた。

「お腹すいているでしょう？」と彼女は尋ねた。「別に・・・」男は強がりを言った。「俺はたった今、大統領との会食を済ませたところだ。だから、あっちに行ってくれないか？」

婦人はさらに大きな笑みを浮かべて、不意にではあるが優しく男の腕をつかんだ。

「な、何しやがるんだ?」と男は怒った声を出した。「ほっといてくれと言っただろ」。ちょうどその時、警察官が通りかかって、「何かお困りですか?」と尋ねた。

「何も困ったことはありません」と婦人は答えた。「私はただ、この人を立たせようとしているんですけど。お巡りさんも手伝っていただけないかしら?」

警察官は頭をかいて、「この人はジャックじいさんですよ。ここ数年、この近辺に居ついているホームレスの人ですが、彼にどうして欲しいんですか?」

「あそこに食堂があるでしょ？彼をあそこに連れて行って、何か食べさせたいと思っているんですの。外はこんなに寒いし・・・」と彼女は答えた。

「お前さんは気でも狂ってるのか?」とホームレスの男は怒鳴った。「俺は食堂になんか行きたくないんだ」と口答えをしたが、その時、もう一方の腕をぐいとつかまれ、立たされてしまった。「お巡りさんよー、俺は何も悪いことはしてないぞ」。

「ジャック、これは悪い話じゃないぞ。それをふいにする手はないだろ」と警官は答えた。

抵抗はしたものの、とうとうジャックは二人に食堂へと連れて行かれ、隅っこのテーブルの前に座らされた。朝の十時ごろであったので、朝食をとりに来た客はすでになく、昼食の客もまだ来てはいなかった。マネージャーが向こうの方から大またで歩いてきて、彼のテーブルのそばに立った。

「お巡りさん、これは一体どういうことですか?」とマネージャーが尋ねた。「この男が何か面倒を起こそうとしているんですか?」

「こちらのご婦人がこの男に食事をおごりたいと言ってるんだ」と警察官が答えた。

「それは勘弁して下さい」とマネージャーは不機嫌そうに言った。「このような人に食べさせるのは、営業上よくありません」。

ジャックじいさんは歯のない口を開けてほくそ笑み、「お姉さん、これで分かっただろ?俺はここにはお呼びでないわけだから、退散するぞ。だから、ここに来るのはいやだと言ったんだ」。

婦人はマネージャーに向かってほほ笑み、こう尋ねた。「あなたはエディ商会という投資会社をご存知かしら?」

「もちろん知ってますよ」。マネージャーはいらいらした様子で答えた。「彼らは週に一度の会議を、私が受け持っている別の宴会場で行うんですから」。

「そしてあなたは、会議中に食事をお出しして、それなりの利益を得ているわけですよね?」

「そんなこと、あなたには関係ないでしょう?」

「私はその会社の代表取締役を務める、ペネロープ・エディと申します」。

「・・・」婦人はもう一度ほほ笑んだ。「それでも私には関係ないとおっしゃるかしら?」と言いながら、彼女は警官に目くばせをした。警官は必死で笑いをこらえている。「お巡りさん、ご一緒にコーヒーとお食事でもいかがですか?」

「ありがたいお話ですが、本官は勤務中ですから」と警察官は答えた。

「では、コーヒーをテイク・アウトでというのは?」

「はい、それならお言葉に甘えていただきます!」

マネージャーが慌てて口を挟んだ。「ではすぐに、お持ち帰り用のコーヒーをお持ちします」。

警察官は、マネージャーが立ち去るのを見ながら、「完全にやり込めてしまいましたね」と言った。

「そんなつもりではなかったんですけど・・・私は単なる気まぐれで、この人をここに連れて来たわけではないのですよ」。

彼女は、驚きのあまり絶句してしまっているディナー客の向かい側に座り、彼の顔をじっと見つめた。「ジャック、私を憶えているかしら?」

そう言われて、ジャックじいさんも、しょぼしょぼした目で彼女を見返した。「そういえば…何だか見たことある顔だなー」。

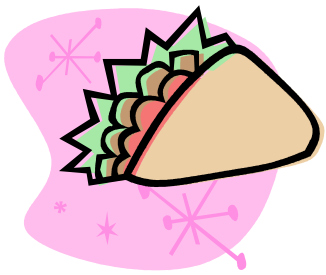
「もちろん、以前より年をとってしまったし、若いころよりは少し太ったかもしれません。昔あなたがここで働いていらしたときに、私は凍えてお腹をすかせて、あそこのドアから中に入ってきたんです」。

「何ですって?」と思わず警官が声を発した。あれほど立派できれいな身なりをした婦人が、かつては貧乏でお腹をすかせていたとは、どうしても信じられなかったのだ。

「私は大学を卒業したばかりでした」と、婦人は身の上話を始めた。「職を求めて都会に出てきたんですけど、何もかもうまくいきませんでした。とうとう手持ちのお金が数セントしかなくなり、アパートからも追い出されてしまいました。数日間、町の通りをさまよいました。ちょうど二月の寒い頃で、私は飢えと寒さで死にそうでした。この食堂が目に入り、私は何か食べる物を恵んでもらおうと思って、中に入ってきたんです」。

急にジャックが顔を輝かせた。「やっと思い出したよ。俺はカウンターの後ろに立っていたんだ。あんたは俺のところにやってきて、働きますから何か食べさせてください、って言った。それは会社の規則に反すると俺は答えた」。

「そうでしたね」。婦人が続けた。「あなたはそうおっしゃってから、私がそれまで見たこともないくらいの大きなローストビーフ・サンドイッチを作ってくれて、あったかいコーヒーもくださいました。それから私に、隅っこのテーブルへ行ってそれを食べなさいと言ってくれました。私はあなたに面倒が及ぶのを恐れたのですが、あなたが私の食事の値段をレジに打ち込むのが見えたので、それで大丈夫なのだろうと安心したわけです」。



「君はあれから自分の事業を起こしたんだね?」ジャックじいさんが尋ねた。

「あの日の午後、私は仕事にありつきました。それから懸命に働きました。その後しばらくして、自分の事業を起こしました。神様の助けを受けて成功することができたんです」。彼女はハンドバッグを開けて、そこから名刺を取り出した。「ここでの食事が済んだら、リオンという私の会社の人事部長を訪ねていらしてください。私は今から彼のところへ行き、あなたの仕事のお世話をするように頼んでおきますから」。エディ婦人はほほ笑んだ。「彼に言って、あなたが洋服を買うためのお金と、住まいを確保するために支払う前金も用意させますから、どうか私を頼っていらしてください。いいですね」。

老人の目には涙が光っていた。「ありがた過ぎて、お礼の言葉が見つかりません」と彼は言った。

「私に感謝しないでください」と婦人は答えた。「神様に栄光を帰しましょう。イエス様に感謝しましょう。彼が私を導いて、あなたと再び出会わせてくださったのですから」。

食堂の外では、警官と婦人が立ち止まって、別れぎわに短い言葉を交わしていた。「お巡りさん、何から何まで手伝ってくださり、ありがとうございました」と彼女は言った。

「エディさん、とんでもないです」と警官は答えた。「私のほうこそ、感謝しています。今日は、生涯忘れられない奇跡を見させてもらいました。それから・・・コーヒーもありがとうございました」。

……

もしあなたが私と知り合いになることがなくても、何も損失はありません。もしあなたが私のEメールに目を留める機会がなかったとしても、少しだけ笑いの機会を逃したに過ぎません。

でも、もしあなたが私の救い主、イエス・キリストに出会っていなかったとしたら、あなたはすべてを失っていることになります。

「あなたのパンを水の上に投げ」るとき、それがどのような形であなたに帰ってくるかは、決して分からないものです。

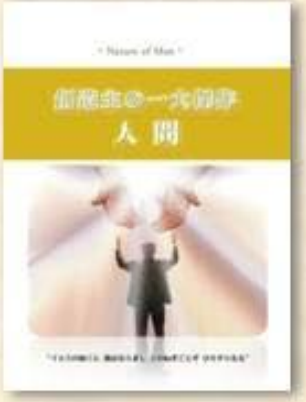
神様はご自身の愛で全世界を包むことができるほど偉大な方であり、あなたの心に触れることができるほど繊細な方でもあられます。その神様が、今日もあなたを守り、導き、支え、祝福してくださいますように!

書籍案内

創造主の一大傑作　人間

人間の性質は、三天使の使命の一部であり、現代の真理である。キリストが取られた人間性はどんなものであったのか？誤った理解は、霊魂不滅と日曜礼拝に導く。研究用シラバスなので多くの証の書の引用文を収録。

価格：1,000円



4つの確かな大事実

価格：100円（税込）

サタンが最も憎む大真理

「贖罪の犠牲と全能の仲保者の働き」を明瞭にする。

価格：200円（税込）

アメリカの変革 －世界の変革！

世界的な危機に備えよう！

価格：200円（税込）

よく解るプロテスタントの新約聖書翻訳

弥永 邦昭 訳　1,200円

創世記、詩篇、箴言、ダニエル書、レビ記16章の翻訳

弥永 邦昭 訳　900円

瀕戸際に立つ神の教会

オメガ

ルイス・R・ワルトン著

弁護士、ルイス・ワルトンは、今我が教会はこの背教のオメガに直面していると警告する。徐々に気づかれずに近づいている背教の大氷山。教会は生き残れるか？この本は永遠の運命が決定される事件に直面する信徒必読の本である。

価格：500円（税込）

特別価格

- ●スタディバイブル　標準型　普通　黒　5,000円
- ●スタディバイブル　標準型　スナップ付き　黒　5,000円
- ●食事と食物に関する勧告　1,500円
- ●健やかな生き方　600円
- ●完全菜食ニュースタートクッキング　壷田淳子著　1,800円

2009年春季セミナーの収録集

"創造主の一大傑作人間" 金城重博 他

- ●DVD【26枚】価格：10,400円（動画）
- ●CD【31枚】価格：6,200円（音声）
- ●MP3【DVD-DATA1枚】価格：2,480円（音声）
- ●カセットテープ【31枚】価格：9,300円（音声）

Anchor
www.srministry.com

サンライズ ミニストリー
〒905-0428　沖縄県国頭郡今帰仁村今泊1471
TEL：0980-56-2783　　FAX：0980-56-2881
Email: contact@srministry.com　www.srministry.com
郵便振込番号：02080-0-12121 サンライズミニストリー

サンライズ・ミニストリー刊行誌　「アンカー」の目的と編集指針　　*Published By Sunrise Ministry Okinawa JAPAN*

我々は次のことを信じてアンカーを出版している。

1. 我々SDAの信仰と使命は三天使の使命である。（4T 384, 2SM 142）
2. 第三天使の使命は人々をキリスト再臨の栄光の前に立たせる特別な備えをさせるものである。（9T 96, 大争闘下 140）
3. 第三天使の使命は人々の心を至聖所に向ける。そこにおいて信者は最後の、特別な癒いを受ける。（初代文集 414, 5,7）
4. 我々は神のご計画されたこの特別な祝福、特別な経験を拒み続けてきた。特に1888年以来（1H）（1890年）
5. ダニエル書8：14の預言は再臨信仰の土台であり、その集の完成はこの預言の正しい理解にかかっている。（生涯我ら人々 422, EV 221, 5T 575）
6. エレン・G・ホワイトは聖書の預言者と同様の霊感が与えられた預言者である。（1SM 34）
7. 最後の時代の嵐に押し流されないようにさせるアンカー（錨）は、三重の使命、聖所、安息日、人の性質、イエスの証（預言の霊）等である。（初代文集 417, 1T 300）
8. アンカーはリレーの最終走者の番号をもち、この世代は福音の信仰が信者の中に、外の世界に完成する最後の時代である。不信仰によって、150年も時が延ばされ、イエスの十字架の苦しみを増している。（大争闘下 193, 教育 328）　信仰による義認の体験によって、再臨を早めることをキリストは待っておられる。再臨とその集完成をこれほど遅らせているのが我々神の民であるとすれば、我々の今日の、義務は何か、約束のものを受ける条件は何なのかを研究し、共に備えたいと思う。
9. セブンスデー・アドベンチストは最後の「残りの民」である。たとい教会がどんなに背教しようとも、激しい戦いの経験を通して、純粋な教会となり、永遠の神の目的がこの教会によって達成されると信じている。